
ペンダント

翔っち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ペンダント

【Nコード】
N8470G

【作者名】
翔うち

【あらすじ】

* 完結済みです*

あるペンダントを大切に持っている孝明は、旅行中に乗った船が突然、謎の襲撃を受ける。たどり着いたのは、犯罪者が住み着く不気味な島。同じ船に乗っていた愛菜、茜、守人と、島にいた謎の青年禎志と共に、孝明は謎の島からの脱出を試みる。

第一章 そのペンダントは

その少女は雨の林道の中を走っていた。新しい靴も、その長い髪もずぶ濡れにして。

何で雨なんて降るの。今日はずっと、さっきまで晴れていたのに。天気予報でも、雨の心配は無いって言うってたのに。早く、家に帰らなきゃ。

冷たい雨粒が体に当たり、時々体が寒さに震える。それでも、山を早く下りようと、彼女は全力で走り続けた。

「きゃっ！」

突然、体が沈んだ。右足が踏み込んだ場所が雨で滑り、悲鳴と共に彼女の体は急な坂を下っていった。たまたま腕に一本の木が引っかけた勢いが弱まり、落ちて十メートル程度の所で止まった。

彼女は両手で膝を押さえた。左膝から、土で汚れ茶色の混じった血が流れ出てきた。痛みで、動く事も出来ない。更に、強打した腹にも激痛が走る。

誰か、助けて。そう言いたいのにな、大きい声が出ない。それに、こんな何も無い山奥に、人が来る訳が無い。でも、このままじゃ・・・お願い、誰か来て。

ぎりぎり出ているか細い声を、無情にも雷が掻き消していく。雨は次第に勢いを増し、落雷の数も増えてきた。

もう駄目だ。そう思った時だった。

「おい、誰かいんのか！」

顔を、滑り落ちてきた方向に上げた。そこには、はっきりと人影があつた。

「大丈夫か！返事してくれ！」

確かにそれは人だった。意識が朦朧とする中、彼女は力を振り絞り、出せるだけの声で叫んだ。

千里学園中学校。バスケットボールの強豪校、千里高校付属の私立中学だ。通称、千里中。都心とそう遠くないこの学校には、現在多くの生徒が通っている。今日は一学期の終業式とあり、ほとんどの生徒は皆楽しみな顔をしている。もちろん、明日からの夏休みの事だ。

そして、こここの生徒の一人、柘孝明も夏休みを楽しみにしていた一人だった。彼は教室の窓側の席で、配られたプリントも仕舞わずに窓の外を眺めていた。今日は雨こそ降っていないものの、空は一面灰色の雲に覆われている。その曇天の中を、二羽の燕つばきが飛んでいた。あの燕達は一体、どこへ向かって飛んでいるのだろう。

「えー、夏だからと言って冷たい物ばかり食べてはいけませんよ。こんな夏だからこそ、しっかりと朝食を食べてバランス良く・・・」

必死に喋っている担任の話も全く聞いていない。孝明のいるこの二年四組は、この校舎のほぼ真ん中、一番上に位置し、景色がとも良い。その景色のずっと奥には東京湾が見える。明後日あつしては、あそこから出発するのか。

孝明はブレザーの左ポケットの中にある物を握り締めた。これは

「孝明、孝明！」

後ろからひっそりと話し掛けてきた菊池大きくちだいじ二に振り向いた。相変わらず、猿みたいな顔だ。眉が濃い。

「何？」

「先生見てるぞ」

「は？」

前を向くと、わざとらしく担任が厳いかついで目線で孝明を睨んでいた。

孝明がその視線に気付くと、教室の所々でくすくすと笑いが漏れた。

「柘。菊池が教えてくれて良かったな。先生の話はちゃんと聞け」

「いや、話じゃなくて、喋りだったんで」

教室の笑いが一段階高まる。担任は困った顔をした。

「柘、そんなんだからお前は」

「あっ、お礼言うの忘れてた。菊池サンキュー」

先生の遊ばれ方にクラス全体が爆笑した。もう先生は呆れて話を戻した。

「で、とにかく、怪我や事故の無いように。では、また二学期な」

一学期最後の礼が済むと、孝明はプリントを鞆に仕舞い始めた。

今日は所属するバスケ部も休みなのだ。後ろで菊池がさつと鞆を持つ。

「さつ、孝明。帰ろうぜ」

「おう」

一緒に昇降口まで下り、靴を履いている途中で菊池が話し掛けてきた。

「なあ、一体窓の外見て何考えてたんだよ」

「え？・・・ああ、ちよつと」

それを聞いた菊池が、何かを思い出したように顔を緩めた。気にせず踵かかとまで靴をしつかり履く。

「もしかして、あの首飾ペンダントりか？」

どきりとした。他の誰かに聞こえていない事を確認すると、軽く頷うなずいた。

「やつぱりな。なあ、教えてくれよ。そのペンダント何なんだよ」

「ええー、お前に教えても、何の得も無いしなあ。損はあるけど」

「その言い方は無いだろ」

いや、その通りだ。こいつはとにかく口を動かすのが好きで、いっつもべらべらとうるさく、何かと喋ってしまう奴だ。この中学に入った時も、いきなり「よう、俺は菊池大二つてんだ。お前は確か柘孝明だっけ？とにかくよろしくな！」なんて言っつて、結局あれからずつと友達だ。でも、一緒にいてなかなか面白い奴ではある。ただ約束を忘れたり、秘密を言っつてしまったりと、どこか抜けた男だ。「なあなあ、頼むよおー」

「じゃあ誰にも言わないか？」

菊池はぶんぶんと首を縦に振る。

「まず、門出ようぜ。ここじゃ人多いから」

そう言つて二人は門を出た。出て二十メートル進んだ辺りで、菊池が微笑みながら俺を見た。

「よし。教える」

「絶対だぞ。誰にも言つなよ」

「オツケーオツケー」

「もし破つたら？」

「好きなだけ俺の上でドリブルしろ」

「DMかお前は」

菊池が笑つた後、少し躊躇ためらつてから、ポケットのペンダントを出した。菊池がわあと声を漏らした。

掌に乗せられたペンダントは、陽の光を眩しく反射させていた。

とても綺麗な、手作りの物だった。円形の周りに、八つの細い菱形ひしがたが刺さっているような、多分、太陽を模かたどつた、鮮やかな銀色の金属の飾り。そして糸が丁寧に編まれた、細い紐ひも。付け易いように、取り外しの出来る仕組みになっている。とても手作りには思えない位丈夫だが、見るからにしつかり手作りなのだ。

「どれどれ！上手いじゃん孝明」

「あつ、触れるのは避けてもらえるかな？」

孝明は少し遠慮がちに言った。菊池が驚いた顔をしている。

「いいじゃん、少し位」

「これ、俺が作った訳でもなくて、俺の物でもないんだ」

横断歩道を渡りながら、孝明はペンダントを見詰める。菊池が問いたそうな顔をしていると、孝明は西側を指した。

「向こうの、えっ……と、何ていう山だっけ……
いいや、名前は忘れた。そこで、俺等と同じ位の女の子が落してい

「ったんだ」

「何故届けないんだよ。その子の住所とか、名前は？」

孝明は少し暗い顔になった。

「その子の名前も、他の事も、知らないんだ。だから、どうすれば良いのか、分かんねえんだよ」

そう言って孝明はペンダントをポケットに再び入れた。菊池は少し考えた後、

「それ拾ったのいつだ？」

と聞いてきた。

「それは、九歳……五年前だ」

「五年前！それじゃあ諦めた方が良いいぜ。向こうもそんなペンダント、もう探してないよきつと」

「そんな、っていうレベルの物じゃない」

思わず、声が強くなっていた。菊池の驚く顔を見て、我に返った。

「あつ、う、ごめん」

「気にすんなって。もうその話は終わりにしようぜ」

暫く沈黙が続いた。この空気が、息苦しかった。それを解いてくれたのは、菊池だった。

「そうだ、明後日の島旅行の話、聞かせてくれよ！」

学校を出て三つ目の信号で止まった時、菊池が唐突に言ってきた。

「ああ、良いよ」

明後日、つまり夏休み二日目、孝明は両親と家族三人で小笠原諸島に行く。そういうツアーに当たったらしい。東京湾から出発する豪華とは言えないが、なかなか良い客船に乗って、小笠原諸島の島々を訪れる二泊三日の島旅なのだ。色々な珍しい食事や、自然体験が出来るらしい。

「孝明、お土産よろしくな！」

そう言って彼は途中の脇道で別れた。お互いに振り向くまで手を振る。彼の嬉しそうな背中が、徐々に小さくなっていった。

空は快晴だった。澄み切った青空が広がり、悩みも全て吹き飛び
そんな気分だった。特に悩みも無いが。

孝明は大きく息を吸い込んだ。蒸し暑くも、少し爽やかな潮風が
体に入ってきた。珍しく首に掛けたペンダントが、風に揺れる。知
ってる人は誰もいないからと、朝から付けてきたのだ。

「孝明。ちよつと位荷物持つて」

母が後ろから声を掛けてきた。片方の大きいバッグを持った。中
身は基本的に服だ。あと孝明は肩掛けの自分のバッグを掛けている。
港には乗る予定の船が停まっていた。予想通りの大きさだった。
貨物船より、小さい位。辺りを見渡すと結構多くの参加者がいた。
軽く三桁位の人数だ。ぼつぼつと外人の姿も見える。

受付の列に並び、並ぶ事約三十分で受付になった。

「三名様で御予約の、柎様ですね？」

「はい、そうです」

この所少し太ってきた父が答えた。チケットを渡すと、その女の
人は慣れた手付きで処理した。

「では、こちらにサインをお願い致します」

父が見た目に合わない滑らかなペン使いでサインをすると、やつ
との事で船に乗る事が出来た。

船の中は意外と普通だった。

「適当な所に座ろう」

と父が開いている席を探していた。なかなか空いている席が無く、
船の後ろの方で席を見付けた。両親はやつと座れた、という感じだ
った。座って二十分後、船がほぼ予定通りの時間で出発した。

孝明は音楽機器のスイッチを押した。そしてイヤホンを耳に嵌め
る。今年の春に出た、話題の曲がゆっくり流れてきた。

声を掛けると、母は読んでいる本に目を向けたまま返事をした。

「ちよつと酔つちやつたから、外出てくる」

母が「うん」と頷くと、孝明は通路を後ろに歩いていった。ちよつと真ん中辺りにある階段を上り、デッキに出ると、再びあの潮風が出迎えてくれた。日は暑いが、なかなか気持ち良い。既にデッキには二十人位の人がいた。見た感じどちらかというところ、混んでいるかも知れない。外側のフェンスにもたれ、暫く風に当たっていた。

イヤホンを再び耳に付けようとした時、何かの音が聞こえたと同時に、足に衝撃がきた。その勢いで膝をフェンスにぶつけてしまった。痛くはなかったが、バランスが崩れそうになったので、慌ててフェンスに掴まった。

落ち着いて振り返ると、女の子が転んでいた。彼女は痛そうに足を摩こすっている。目が合うと、彼女は慌ててフェンスに掴まりながら、やはり痛そうに立ち上がった。

「す、すいません。ちよつと突然強い風が吹いたんで、バランス崩しちゃって」

「あ、いや全然大丈夫です」

目の前で恥ずかしそうに頭を下げる少女は、よく見ると結構可愛い子だった。学校にもこんな女子は一人もいない。年も孝明と同じ位だった。

「君もこのツアーに？」

「うん、正直乗り気じゃなかったけど」

同感だ。俺も正直そんな乗り気ではない。

彼女はそのショートヘアを掻き分けながら笑った。

「まあ、でも家で暇してるよりは良いかな、って思ってた」

「ふうん……」

彼女はフェンスを背に寄り掛かった。髪が風に揺れるのが、印象的だった。

俺も寄り掛かって空を仰いだ。雲一つ無く、ただ太陽だけが暑い陽射しを送ってくる。夏の潮風は蒸し暑く、体中の汗を噴き出させるような、しかしどこか涼しげな空気を運んできた。半袖から出た

腕が、光を反射した汗によって輝く。ぶら下がったイヤホンから僅かに音楽が漏れていた。

ふと、彼女の視線を感じた。振り向くと、彼女は不思議そうに孝明の胸元を見ていた。

「作ったの？これ」

「いや、本当は俺のじゃないんだ」

彼女が目線を上げた。二人の目が合い、さつと上に逸らした。

「でも、大切な物なんだ」

「へえ……」

暫く眺めた彼女が口を開いた。

「ねえ、それって」

それは突然の事だった。船の中央にある客席の方から、突然船を揺るがす程の爆発音がした。周りで悲鳴が上がる。

孝明は慌てて崩れそうになった彼女の手を取り、もう片方の手で手摺てすりに掴まった。彼女の体が、床まであと数センチの所でがくりと止まった。そして、孝明は音の方に視線を移した。孝明は目を見開いた。

「な、何だよこれ……」

彼女もフェンスに掴まってから、そつちに振り返った。

今さつき孝明が座っていた客席の方から、巨大な炎が上がっていた。あそこには、父と母が……

「え……？何なの……夢？」

「げ、現実だ……」

船の中心が燃え上がっている。その謎の爆発によって、天井が剥がれていた。中の乗客の姿が少し見えた。

「あつ、父さんと母さん！」

孝明の視線の先には、煙と火に苦しんでいる、両親の姿があった。このままじゃばい。自然に足が動いた。

しかし、突然後ろから手を引つ張られた。というより掴まれていた。振り返ると、彼女が焦った顔をしていた。

「あ、危ないよ！行っちゃ駄目だよ！」

「でも、そんな事言つてられない！」

もう一度船が大きく揺れた。今度は逆の立場になり、二人共倒れてしまった。しかし、船上には何も無い。たださっきの炎が燃え上がっているだけ。一体、何が起こつたんだ？

孝明の頭にある事が浮かんだ。急いでフェンスの間から海を覗く。どこだ……どこかに……

あつた！

「やっぱり……」

「こ、今度は何？」

「海中からだ」

海の中を窺うと、それはいた。

楕円形の黒い影。

潜水艦。何故こんな所に……船の

ちようど真下から煙が上がってきた。またその影から、二つの弾が撃たれた。

「伏せる！」

再び凄まじい衝撃が船を揺らす。船が少し横に傾いた。

しかし、この時は揺れただけでは無かった。船が大きく旋回し始めた。人々が大きく横に揺られる。孝明もやつとの事で手摺に掴まった。

「大丈夫？えつと、えつと……」

「孝明。柀孝明だ」

「私は須賀愛菜すがあいな。よろしく、って、それどころじゃないか」

恐らく操縦室も揺れによって安定していない。船の進行が、ふらふらながらも真つ直ぐになった。前方には、標高はそんなに高くはない、一つの島。このままだと、ぶつかる！

炎上した船はどんどん島に接近する。その時、孝明はある物が目に入った。

「何だあれ！」

「ど、ど？」

正面の島の頂上付近だ。まるで、ビルのような建物があった。その他は全て森。

何だあの島は。何故か、寒気がした。とにかく、この状況を逃れなければ。

「あっ」

そのビルの一部から、黒い球が発射された。それは大きい弧に乗って、確実にこっちに向かっていている。このままいくと、多分この辺に落ちる！

「ここは危険だ！離れる！」

孝明は愛菜の腕を掴んで、船の後ろへ向かって走り出した。他の人が混乱していて、走りにくい。

「弾が、落ちる！」

「た、孝明君？」

その瞬間、あの黒い弾が船体のほぼ真ん中に落ちてきた。

叫ぶ間も無かった。そこで大爆発が起きた。船の半分より前方はほぼ炎に包まれた。

二人の体はかなり後方に吹っ飛ばされた。弾は複数。次々と爆発が起こる。

「きゃあ！何これ？」

「テロ？何だあの島は！」

「あ、ぶつかる！」

「え？」

孝明が前方を向くと、もう目の前に大きな崖が迫っていた。

目を開けると、そこには砂浜と綺麗な海が広がっていた。視界の狭さと角度から、自分が横になっている事に気が付いた。愛菜はゆっくりと上体を起こした。

「ここは……?」

辺りを見渡した瞬間、愛菜は愕然がくぜんとした。

砂浜に倒れる、多くの人。向こうで横に倒れ、炎上している壊れた船。数人起き上がっているが、自分同様、戸惑っている様子だ。倒れている人は、血だらけ。生きているかも分からない。

「あつ、痛つ……」

愛菜も頭から血を流していた。意識が戻る程、痛みが増してきた。はっと、数メートル前に自分と同じ位の少年を見付けた。慌てて駆け寄った。そして体を揺する。

「た、孝明君！孝明君！」

うつ伏せの彼は、咳と同時に多少の水を吐いた。そしてゆっくり目を開けた。

「……ん、ここ……は？」

「ああ、良かった……」

愛菜は一気に体から力が抜けてしまった。彼は腕に力を入れて起き上がる。同時に首と左肩のちょうど真ん中辺りを押さえた。ぐうと呻き声が漏れる。

「もしかして、あの正面にあつた、島？」

愛菜はその言葉を聞いて島の頂上を見上げた。

あの建物だ。一体、この島は何なの？何故、今こんな事になっているの？

愛菜の表情を読み取ったのか、孝明は辺りを見渡した。

「な、何だよこれ……」

「あの時衝突して、こうなつたみたい」

「ていうか、その傷……」

孝明が愛菜の頭を指差して言う。

「私は大丈夫だよ。これ位なら」

「いや、駄目だ」

彼は自分のバッグからミニタオルを取り出すと、私に近づいてきた。余りに接近してきた彼に戸惑い、腕を後ろに突く。

「ちょ、ちょっと?」

「動くな!」

びくつと震えてしまった。彼が傷の部分にタオルを当てる。愛菜はじつと痛みを堪えた。彼は優しい手付きで血を拭きとった。

「・・・・・・よし、オツケー」

「あ、有難う」

彼は最後にガーゼを貼ってくれた。こんな優しい男の子、あの日以来だ。ってこんな時に優しくない人はあまりいないか。

「ちょっと様子を見てくるから、ここで待ってて」

「うん」

愛菜はそこに座り込んだまま、歩いていく孝明の背中を見詰めていた。

第二章 たった一人

孝明は燃え上がる船体に向かって走る。そこには沢山の人がいた。生きている人も、死んでいる人も。

この中に、母さんと父さんがいる筈だ。

「どこに……」

他の人達を横目に、その間を走り抜ける。愛菜と別れて五分程走った所で、孝明は足を止めた。それ以上、前には進めなかった。

「そんな……」

孝明が止まっていたのは、大きな船体の瓦礫がれきの前。その下から出てくる腕と、足。あの腕時計と、あの靴は……

「父さん、母さん……」

孝明は膝を落とした。今起きている現実が、全く受け入れられなかった。

「嘘だろ……何で、何でだよ……」

両親が、死んだ……

その腕と足は、動く気配すら無い。ただ、所々血が飛び散っているだけ。孝明には、受け止めきれない現実だった。

孝明は、数分間動けなかった。そのままの体勢で、ただぼつと固まっていた。

「……大丈夫？」

その声で、やっと孝明は動いた。振り返ると、愛菜が心配そうに見ていた。

「来たんだ」

「ごめん……遅かったから」

愛菜が合流しても、空気は変わらなかった。二人とも俯き、黙ってしまった。その時、孝明は一つ思い出した。

「あ、君……家族は？」

「私？」

「うん」

彼女は暗い顔になった。って事は……………

「駄目だったのか」

「違う」

「え？」

「別に、生きてるかは知らない」

「どういう事？」

その瞬間、激しい銃声が耳に響いた。二人は同時に振り返った。視線のずっと先に、銃を持った二人の自衛隊のような人がいた。でも、違う。自衛隊じゃない。それなら、無意味に人を撃つなんて事、絶対に無い！

まさか、あの潜水艦や爆弾と同じ、この島の……………

「孝明君、逃げよう！」

「え、ちよつと待って……………」

孝明は振り返った。視線の先には、あの腕と、足。

父さん、母さん……………

「早く！撃たれちゃうよ！」

「くつ……………」

感情を殺して立ち上がり、走り出した。一斉に他の乗客達も走り出した。そして、銃声も鳴り響く。

「森だあー！森へ逃げるんだ！」

誰かが、そう叫んでいた。皆、洗脳されたように森へ入り込んでいく。しかし、彼等が走った跡には、撃たれたり、他の人に潰されて倒れている人が何人もいた。ごった返す波の中、愛菜と孝明も必死に走り逃げていた。やがて森に入り、光が差さなくなってくる。

その時、孝明が右側に何かを見た。急に孝明が止まり、愛菜はつんのめりそうになった。

「孝明君！」

「待って！あれ……………」

人混みの中、二人の数メートル右に、足首を押さえ込んで動けな

くなっている少女がいた。この人混みの中、足を痛めてしまったのか、顔を苦痛と恐怖に染めている。

「助けよう！」

「そ、それどころじゃ………」

「あんなの放っておけない！」

孝明は人にぶつかられながら、何とか彼女の所に辿り着いた。愛菜も必死に孝明の手を掴み、離れないようにしていた。

「大丈夫？乗って！」

孝明は彼女の前にしゃがみ込んだ。彼女は泣いていたのか、上げた顔には涙の痕があった。

「あ、有難う………」

「よし、行こう！」

「うん！もう迫ってきてるよ！」

「よし急ぐぞ！」

孝明が立ち上がると、再び走り出した。逃げている間、ずっと彼女は背中で泣いていた。

「うう、ごめんなさい。本当に………」

「今はそんな人を見捨てていく状況じゃない！」

「でも、一々倒れてる人を助けてたら」

「だから、今こうやって逃げてるんだよ！」

孝明と愛菜はとにかく走った。逃げられる限り、生きる希望がある限り。

「有難う、本当に有難う………」

実際、誰も逃げている者はいない。

この島にいる限り、ここから出れない限り、乗客達の命は、あいつの手の中なのだ。

孝明と愛菜は座り込み、息を切らした。助けた少女は二人の前に座り、胸元を押さえて気持ちを落ち着かせているようだった。

「はあ、助かった……」
「良かったあ……」

二人の掠れた声は、激しく流れ落ちる水の音にほぼ掻き消されていた。三人は滝の裏に逃げ込んだ。滝の裏には小さな洞窟程のスペースがあった。三人の他にも、数人逃げ込んだ人達がいる。

「私、あんなに走ったの初めて……」
「俺だつてこんな走った事無いよ。バスケット部の合宿よりきついし……」

孝明は息を切らしながら、前の少女を見た。ちょうど彼女も顔を上げ、目が合った。

「あ、足大丈夫？」

「あ、あああ、うん。本当に……」

彼女は気が気じゃないと言った様子だった。するといきなり、彼女が孝明の手を両手で握った。彼女の潤んだ目は、真剣に孝明の目を捉えていた。

「本当に、有難う！私、もう本当に死ぬかと思って……」

「いや、当たり前的事をただけだつて……」

あまりにじつと目を合わせてきたので、孝明は思わず目を逸らしてしまった。ちらつと目だけ前に戻すと、彼女は下を向いて泣いていた。

「ほら、もう泣かないでよ」

「うん、有難う……」

その間もずっと手は握られていたので、孝明は少し赤くなつてしまった。

「あ、あの……」

「孝明君、まあそこは……」

愛菜の説得で、孝明は彼女をそのままにしてあげた。

「ほ、ほら、元気出して！」

「孝明君……」

「……」

孝明まで落ち込んでしまった。その時、彼女がすつと顔を上げた。「ううん、大丈夫。少し元氣出た」

「あ、ああ、それなら良かった」

その時、突然彼女は孝明に抱き付いてきた。突然の事態に、孝明だけでなく愛菜までもが驚いた。

「あ、ちよ、ちよつと？」

「ずっと、ここにいて……」

「あの、えっ……あ、愛菜もどうにかして」

「いや、そう言われても」

愛菜の視線が彼女に行った時、彼女は愛菜の方を見た。目が合うと、さつと目を逸らしてまた孝明の胸に蹲つづくまった。愛菜は首を傾げ、髪を梳いた。

「何なのよ、もう……」

「どうしたの？」

「いや、何でもない」

暫く、三人は黙っていた。他の人達は泣いたり、怪我をして暗い顔をしていた。それを見た孝明は、上を向いて息を吐いた。

俺、何でこんな冷静なんだろう。自分でも驚く位、何とも感じない。さつき逃がっている間も、恐怖心が全く無かった。だから、この子も救えた。俺、凄い事が起こって変になっちゃったのかな……

そんな事を考えていた孝明が我に返ったのは、顔の間近に女の子の顔があったからだ。あまりの顔の近さに、孝明は緊張してしまっ

た。

「あ、お、起きた？」

「うん……あの、まだ名前、言っ

てなかったね」
表情を赤くしている孝明に対し、彼女は何事も無いように真っ直ぐ孝明を見詰めている。

「私、茜あかねって言うの。本田ほんだ茜。あなたは？」

「お、俺？俺は、ひ、柊孝明。孝明で良いよ」

「あ、私は須賀愛……」

「孝明君、幾つ？」

ん？今、何気なく愛菜がスルーされなかったか？

「俺は十四。中二だよ」

「本当？じゃあ私と一緒にだ」

茜という彼女は初めて笑った。それでもまだ離れない為、孝明は緊張しっ放しだった。

「あ、私も中二……」

「ねえ、孝明君は何部に入ってたの？」

「あ、ば、バスケットだよ。千里中なんだ」

「あの千里中？わあ、凄い！」

「凄い、って言われても、俺補欠だけど」

茜は孝明に対して興味津々だった。そんな中、一人だけ不満そうな愛菜。

「あ、孝明君って好きな人とかいるの？」

「え、いや、いないけど」

「ねえ、あの……」

「えっ、本当にいないの？」

「う、うん」

「そっかあ、そうなんだあ……」

茜はふふふと笑いながら、孝明を上目線で見た。その隣で、愛菜がもどかしそうにしていた。

「孝明君、結構持てるの？」

「いや、そんなに……」

「へえ、こんなに優しいのになあ」

「ねえちよつと！」

突然の愛菜の声に、孝明は驚いてしまった。茜は驚く事も無く、ゆっくりと振り向いた。愛菜は、顔を赤くして怒っていた。

「ど、どうしたんだよ愛菜」

「孝明君は何でもないけど、あんた何なの？」

茜は表情を変えずに、首を傾げた。

「何で私を無視するの！」

「え、別にしてないよ。ね、孝明君」

「えっ、ああつと……」

「孝明君は黙ってて！」

「ご、ごめんなさい……」

「別に孝明君は何もしてないじゃん。何でそんなに怒るの？」

「あなたが無視するからでしょ！何で無視するのよ！」

茜は首を傾げ、孝明の方に振り向いた。

「だって、私は今、孝明君とお話してるんだもん。ねーっ、孝明君

！」

「あ、ああ……」

愛菜は顔を真っ赤にして、膝を抱えてしまった。

「やっぱり、こんな子助けなきゃ良かった！」

「あ、愛菜、それは酷ひどいよ」

「さっすが孝明君、優しいねっ」

「あ、有難う……」

「孝明君も何デレデレしてんのよ！」

「え、俺は別に……」

すると愛菜は突然立ち上がり、出口の方へ向かっていった。

「あ、愛菜？」

「もう、いつまでも二人でいちゃいちゃしてれば良いじゃん！」

「ちょ、愛菜。外は危ないって」

「良いよ、どうせこの島脱出出来なきゃ殺されるんだから！」

「だからちよつと待て」

その瞬間、近くで物凄い爆音がした。沢山の悲鳴が一度に上がった。茜はぎゅつと孝明に抱き付き、愛菜は出口の所で座り込んでしまった。

「な、何だ？」

「きゃあ恐い！助けて孝明君！」

「何か、茜楽しんでる？」

孝明ははっとして、愛菜の方に目を向けた。愛菜は恐怖の余り、その場に蹲っていた。

「愛菜！」

「うるさい！放っておいてよ！」

「ほっとけるか！こっち来い！」

愛菜は全く動かない。孝明はその場に茜を残し、愛菜の元に走った。すると、もう一回爆音が響いた。その時、嫌な予感がした。

孝明ははっと天井を見た。明らかにさっきは無かったヒビが、大きく入っていた。このままだと……

「まずい、愛菜、茜……！」

気付いた時、はっとした。ちょうど立ち止まった所が、二人の間地点だった。他の人は異変に気付き、脱出し始めている。しかし、愛菜は蹲ったまま、茜は足を怪我していて動けない。

どうする……時間が無い！

愛菜か、茜か？早くしないと、全員終わる！

「愛菜、出る！早く皆に続いて出る！」

孝明はそう叫びながら、洞窟の奥に向かった。茜を抱き上げると、一気に出口へ向かった。もう、ずっと奥の方では崩れ始めている。

「愛菜、動け！」

「やっぱり、私じゃないんだ……」

「立てよ！」

孝明は茜を背負ったまま、愛菜の目の前で立ち止まった。

「愛菜、早く立て！」

その一瞬が、運命を分けた。

ついに出口が崩れ始めた。少しずつ、塞ふさいがっていく。愛菜の手を取った孝明は、はっと振り返った。光が、徐々に消えていく。

「愛菜！」

「もう、無理だよ……」

……愛菜のその声と同時に、出口は塞がってしまった。しかし、ただ塞がっただけでは無かった。

ほぼ同時に、大量の水が流れ込んだ。それはもう、川のようにだった。

「愛菜、立て！」

愛菜は、全く反応しない。

僅かな光が射し込んでいた。洞窟の中には、孝明達を含めて十数人程度しかいなかった。中には小学生位の子供もいた。余りの恐怖に泣き叫んでいる。いや、誰も近くにいない事から、親と逸れてしまったのかも知れない。地面は膝の辺りまで浸水し、座り込んでいる愛菜は腰まで浸かっていた。

「……この、馬鹿！」

孝明の声が響いた。愛菜はそれでも顔を上げなかった。

「どうせ、私は一人なんだよ……」

「何で今そんな事言うんだ！状況を読め！今そんな事気にする状況か！」

「死んだって、悲しむ人なんか誰もいないよ」

愛菜は微かに涙声だった。それに気付き、孝明は口を止めた。息を吐き、岩が盛り上がり過ぎて濡れていない所に茜を座らせた。

「どうすんだよ、この後……」

完全に、出口は塞がれてしまった。奥の方も崩れていて、何より暗くて何も見えない。これ以上は崩れないだろうが、これ以上出口も無い。ある意味、完全な密室となってしまった。

すると、茜が孝明の手を取った。

「孝明君、大丈夫だよな？」

「え、ああ……うん」

はつきりとは言えなかった。茜も少し、余裕が消えたようだった。愛菜に至っては、ずっとあのままだ。

「くそっ！」

孝明は足元の水を蹴った。水の音は洞窟中に響いた。波紋が少しずつ広がっていき、やがて消えた。

何で、何でたかが女子二人、救えないんだよ。俺は二人と一緒に助けようとした。それが、間違いだったって言うのか！

孝明は、自分に責任を押し付けてしまう性格だった。明らかに他人のミスでも、その事柄に自分が関わっていれば、自分の所為だと思ってしまうのである。

「何でこんな事に……」

「た、孝明君の所為じゃないよ」

「茜……」

「大丈夫だよ。私、孝明君の事頼りにしてるからね」

「あ、うん……」

その言葉に、孝明は胸元のペンダントを握り締めた。このペンダントを握るのは、孝明が決心を決めた時の癖でもあった。それを見た茜が、不思議そうにそのペンダントを見た。

「あれ、孝明君。それなあに？」

「ん、ああ、これ？」

「何か可愛いね。ちよつと見せて」

二人の会話に、初めて愛菜が顔を上げた。

「あ、愛菜。早く立って。ずつと水に浸かってたら風邪引くぞ」

「今は風邪どころじゃないでしょ」

「いや、そうだけど」

「やつとの事で愛菜は立ち上がった。」

「私、そのペンダント見覚えあるよ」

「え？」

その声に、孝明は驚いて振り返った。声の主は、茜だった。

「本当？」

「うん、まあちよつと記憶が曖昧だけど……六、七年前かな。それを付けてる女の子がいたの。私よりちよつと年上っぽかつ

たけど、凄くその人ペンダントが似合ってた。あ、でもそのペンダントじゃないかも……………」

「そう、なんだ……………」

もしかしたら、その子かも知れない。

「じゃあ、茜のではない、の？」

「うん、私のじゃない」

孝明は溜息を吐いた。やっぱり、そう上手くその子と遭遇そっくわうする訳ないか。それも、こんなツアーでな。今までで逸れちゃった人だっているし、中にはもう、死んでしまった人も……………」

「俺、このペンダントの持ち主をずっと探してるんだ。昔、怪我してる女の子を助けて、その子が落としていった物なんだ。でも、俺はその子の名前も住所も分かんなくて」

「きつと会えるよ」

「うん……………だから」

「だから？」

「絶対、ここを脱出する！」

もう一度、孝明はペンダントを握り締めた。

第三章 守り人

崖を登ると、例の崩れた崖が見えた。

「あそこか……」

滝の下を覗くと、壁が崩れている。そこに滝が流れ落ち、水が四方八方に飛び散っている。もはや川の原型は既に無い。

あそこに、あの船の乗客が閉じ込められているのか。

俺は腰に付いているバツグから、手榴弾しゅりゅうたんを一つ取り出した。これさえあれば、あの洞窟に穴を開ける程度の事は出来る。

スイッチを開けると、それを滝の下へ投げ込んだ。そして俺は、素早くその場を後にした。

「俺は、間違つてなんかいない……」

走つてすぐに、爆発音が耳に届いた。

突然の激しい爆発に、三人は吹っ飛びそうになった。他の人も、驚いたり叫んだりした。

「な、何？」

「何だ、今の……」

孝明は爆発音がした方を見た。舞い上がっていた砂埃が落ち着くと、その先に明るい出口が見えた。

「出口が、開いた……」

「に、逃げられる。逃げるぞ！」

他の人が歓声を上げ、次々と出ていった。孝明達はどうする事も出来ず、ポカンとその光景を見ていた。

「孝明君、ねえ」

「あ、何？愛菜」

「今のうちに、早く逃げようよ」

孝明ははつとし、頷くと茜を背負った。その時、ふと孝明は振り

返った。

一人、泣きじゃくっている男の子がいた。見た目的に小学生位で、恐らくこの混乱の中で親と逸はくれてしまったのだろつ。

「あの子も連れていこう」

「え、でも……」

「ここで一人置いていくのは可哀想だ」

愛菜はそれを聞くと、ゆっくりと男の子の方に近寄った。

「君、大丈夫？」

「怖いよお……」

「大丈夫だよ。怖がらないで」

「うわあああん！」

男の子は泣きじゃくりながら、愛菜にしがみ付いた。

「ほら、もう泣かないで。男の子でしょ？」

「う、うん……」

男の子はそうは言っても泣きながら、こっくり頷いた。

「さ、行こう。ここはもう危ないよ」

「うん、移動しよう」

孝明は茜を背負い、愛菜は男の子の手を引っ張りながら、その洞窟を後にした。

四人は遅れた為に、他の大人の人達と逸はくれてしまった。ただ寂しく、暗い森の中をさまよっている。

辺りは既に真っ暗で、空にも星が見えていた。

「今、何時かな？」

「もう疲れたよ」

愛菜が後ろで溜息を吐いた。孝明も茜を背負いながら、一生懸命足を動かしていた。

「でも、早く隠れる場所を探さねえと、奴等に見付かっちゃうからな」

「守人君、大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ、愛菜お姉ちゃん」

守人、茂川^{しげかわ}守人。さつき助けた、あの小さな男の子だ。小学四年生で、やはりあの船の乗客だ。あの浜辺での大混乱で、両親と逸れてしまったらしい。まだこんな小さいのに、可哀想な子だ。そしてやっぱり幼い所もあるのか、愛菜の手を握って離さない。どうやら恐いようだ。まあ、仕方の無い事だろう。

「ったく、何でこんな事に……」

「それにしても、何なのこの島」

「地図にはこんな島、載ってなかったけどな」

「とにかく、安全な場所を探そうよ」

「そうだな、茜の言うとおりだな」

それから、光の無い森の中を歩き続けた。すると、突然右の方から物音がした。孝明は小声で皆に呼び掛けた。

「皆、伏せる！」

「え？」

「早く！」

孝明の指示に、愛菜と守人は戸惑いながらしゃがみ込んだ。四人はその方向から隠れるように、茂みの裏に隠れた。

「奴等だ」

その方向には、二人の隊員がいた。どうやらパトロールのような事をしているらしい。四人はその二人の会話に耳を傾けた。

「おい、そつちはどうだ。この辺にはもういなかったぜ」

「あ、お前知らないのか？」

「何だ？」

二人のうち、どちらが話しているかは分からなかったが、声ははつきりと聞こえた。

「あの乗客ども、もう全員殺したって上から連絡来たぜ」

その言葉に、孝明達は言葉を失った。

全員殺した？まだ、ここに四人いるじゃないか。まさか、あの時

先に出ていった人達や、別の場所に逃げていた人達は、全員……

俺達以外、全員……？

「ひゃっひゃ、馬鹿だなあいつ等。この島の中で逃げてても意味が無えつつの」

「本当だな。第一、勝手に入ってきたのお前等だろ、って感じだよな」

二人の会話に、四人は怒りを覚える事は出来なかった。それを押し潰す程の恐怖心が、心の中に植え付けられていたのだ。全員の背筋に寒気が走り、守人は今にも泣きそうになりながら愛菜にしがみ付いていた。

「愛菜お姉ちゃん、怖いよお……」

「だ、大丈夫よ、心配無いからね」

愛菜はそう言つて、守人を抱き締めた。そう励ます愛菜の声も、か細くかなり震えた声だった。茜も孝明にずっとくっ付いていた。

「孝明君、どうしよう……」

「とにかく、奴等がいなくなったら、ここを離れよう」

もういないと思っっているなら、油断する筈。それなら、その隙を突く。

奴等の会話は、まだ続いていた。

「じゃあ、今日はこの辺で大丈夫だな」

「ああ。どうせ生き残ってる奴がいても飢え死にするだろ」

「おう。じゃあお疲れ」

そうして、彼等は向こうへ歩いていった。そうして、孝明はぼつと胸を撫で下ろした。

その瞬間だった。

「ひゃっ！」

突然守人が声を上げてしまった。それも仕方の無い事だった。すぐ後ろに、まるでバットのようになく黒光りする蛇がいたのだ。驚いた四人は、立ち上がってしまった。

「あつ、やべつ！」

孝明ははつとして振り返った。さつき話していた二人が、こつちに気付いて戻ってきたのだ。

「痛い！」

その声に、孝明は焦った。愛菜の足に、あのでかい蛇が噛み付いていたのだ。愛菜の足は、かなり出血していた。

「くそつ、離れる！」

孝明は思い切り蛇を蹴り飛ばした。蛇は三発目にやっと離れ、愛菜が座り込みそうになった。しかし、その手を引っ張り、孝明は叫んだ。

「逃げろ！奴等が来てる！」

すばやく茜を背負い、孝明はそのまま愛菜の手を引っ張って走り出した。守人も必死に走った。後ろからは、大き過ぎる恐怖が迫ってくる。

「隠れてやがったか！逃げるな！」

「今すぐ殺してやるぜ！」

三人は必死に走った。しかし、追い付かれるのは時間の問題だった。

茜を背負って、愛菜を引っ張っている孝明。足を蛇に噛まれ、痛みで上手く走れない愛菜。一番メンタルが弱く、不安に染まっている守人。只でさえ全員、体力は消耗した状態。逃げ切れる可能性は、ほぼゼロだ。

「距離はある！とにかく走れ！」

「もう、もう無理だよ！」

「弱気な事言うな！まだ生きられる！」

孝明は一瞬だけ振り返った。その時、愛菜の異変に気付いた。明らかにさつきより体調が悪い。この衰弱は、恐怖心の所為じゃない。まさか、さつきの蛇………毒蛇か！

その時、足元にコンツと何かが落ちた。孝明はそれを見た瞬間、一気に恐怖心が膨れ上がった。

それは、奴等の投げた手榴弾だった。

「まずい！」

気付いた時には、もう遅かった。手榴弾は一気に爆発を起こした。その手榴弾は、威力よりは範囲を重視したタイプなのが幸いし、酷い状況にはならなかった。しかし、四人はその勢いで、前方にかなり吹っ飛ばされてしまった。

「うわっ！」

吹っ飛んでしまった四人は、地面に強く叩き付けられ、勢いよく転がった。

突然、彼等の体はがくりと沈んだ。それはまるで、落ちていくように。彼等が転がった先は、断崖絶壁だったのだ。下には、また深い樹海が広がっている。

四人はもがく事すら許されなかった。余りの勢いに、止まる事すら出来ない。四人はただ空しく、崖から転がり落ちていった。

「うわあああああああ！」

「きゃあああああああ！」

ぼろぼろの彼等は、暗い闇の底へと落ちていった。

激しい痛みで、目が覚めた。すると、眩しい光が目を射した。結局、朝まで眠っていたのだ。

「痛っ！」

起き上がったと同時に、守人は右腕を押さえた。痛みの生じる部分には傷があり、赤く染まっていた。しかし、一晩して血は止まっていたようだった。そのかわり、流れた血が服に染みっていた。

守人は不安に陥り、おどろい辺りを見回した。何も無い事を確認して、はっとした。

いつも温かく守ってくれる、親も親戚もいないのだ。体の小さい守人は、一人では何も出来ない。スポーツも不得意、いつも家でテレビを見たり、絵を描いたり。

そんな守人は、いつも優しく、少し過保護な両親によって育てられてきたのだ。そんな守人は、基本一人になると動けなくなる。そして、泣き出したり、蹲うつすくまったり、必死に助けを求めようとするのだ。そして、助けて欲しい時にいつも脳裏にうつすらと映る、誰かの背中。

すると、そんな守人の視界に頼りになる希望が映った。

「あつ、愛菜お姉ちゃん！」

守人は半泣きの声で呼びながら、愛菜の方に駆け寄った。愛菜は守人の十数メートル後ろにうつ伏せで倒れていた。守人が泣きながら肩を揺ると、ゆっくり目を覚ました。

「ん、あ……」

「あ、愛菜お姉ちゃん！」

愛菜が起き上がると、守人はぎゅっと愛菜の胸に飛び付いた。そんな臆病な守人を、愛菜は優しく抱き締めた。

「あ、守人君、大丈夫？」

「う、うん……」

守人は泣きじやくりながら、愛菜を見上げて頷いた。それを見た愛菜は笑ったが、その表情は明らかに衰弱していた。

「あ、愛菜お姉ちゃんも……」

「うっん、私は大丈夫よ」

愛菜は幼い守人に弱い所は見せられず、無理やりな笑顔とか細かい声で答えた。

その時、二人の後ろから物音がした。二人は驚いて振り返った。

守人は怯えて愛菜に再びしがみ付き、愛菜は守人の体を抱き寄せた。「だ、誰？」

息を乱す愛菜はそう言った後、安堵の溜息を吐いた。

茂みから出てきたのは、孝明だった。頭から流血していたのか、赤い筋が右頬を伝っている。

「何だ、孝明君……」

「愛菜、守人も一緒か。茜は？」

孝明はやつてくるなり、他の三人の心配をしていた。

「茜ちゃんはいないよ。あっ……………」

「あ、愛菜！」

愛菜は突然頭を押さえ、ふらつと倒れそうになった。倒れそうになった所を、駆け寄ってきた孝明がぎりぎり支えた。

「おい、愛菜！」

「だ、大丈夫だよ。ちょっと目眩がしただけ」

「大丈夫じゃねえよ、無理するな！」

孝明は膝で愛菜の upper body を支えながら、額に手を当てた。守人も愛菜の膝から降り、心配そうな顔で愛菜を見た。

「熱もあるな。やっぱりあの時の……………」

毒蛇か。

愛菜は出血も酷かったからか、顔は真っ青になっていた。体ももう、孝明に寄り掛かってからは起き上がれそうになかった。完全に病人状態だった。

「くそつ、茜も探さなきゃいけないのに……………」

「ぼ、僕が探すよ」

守人は孝明を見詰めて言った。これでも、守人にとってはかなり勇気を出した言葉だった。

「いや、守人は行っちゃ駄目だ。お前が一人で行っても何も出来ない」

その言葉に、守人は落ち込んでしまった。

やっぱり、僕は何も出来ないんだ。孝明お兄ちゃんからでも、そう見えるんだ。

「守人」

孝明は突然、守人の肩を掴んだ。

「お前は、男の子だよな？」

「え？う、うん……………」

「だったら、女の子は守らなくちゃいけない。これは分かるな？」
「……………うん」

いつも守られる側の守人は、俯きつ放しだった。

「俺が戻るまで、愛菜を見ててくれ。俺は茜を探しに行ってくる。そう遠くにはいない筈だからな。何かあったら、大声で俺を呼べ。それなら、出来るな？」

その言葉に、守人は顔を上げた。守人にとって、人を守る事は初めてのことだった。

「僕が、守るの？」

「そうだ。お前が愛菜を守ってるんだ」

「僕でも、出来る？」

「ああ、出来るさ。だから、な？」

守人は涙を拭くと、孝明に向けて大きく頷いた。

「うん。僕、頑張る」

「よし。じゃあ、任せたぞ」

そう言つと、孝明は丁寧に愛菜を寝かせ、さつきとは逆の茂みに入つていった。

しかし、孝明がいなくなると、守人は突然心細くなつてしまった。同時に、物凄い不安が募り始めた。

どうしよう、本当に何かあったらどうしよう……

「守人君」

その優しい声に、ふと視線を下げた。守人の表情を見て、愛菜が声を掛けていた。

「大丈夫よ。何も無いから」

「愛菜お姉ちゃん……」

「私も頑張れば動けるから。そんな顔しないで」

「うん……」

そうは言つても、守人は内心かなり緊張していた。そんな守人を励ますように、愛菜が積極的に声を掛けていた。しかし、弱っている愛菜は、段々と言葉数が減つていった。

いつの間にか、辺りはしんとしていた。

まだかな。孝明お兄ちゃん、早く帰つてこないかな……

その時、向こうの茂みがガサツと動いた。守人は立ち上がり、笑顔で振り返った。

「あっ、孝明お兄ちゃ……………」

しかし、孝明の姿はそこには無かった。いたのは、嘲笑いを浮かべる兵士の男だった。

「へへ、獲物発見だな」

守人は腰が抜けて、その場に座り込んでしまった。男は一步ずつ、ゆっくりと近付いてくる。

「ははっ、銃は忘れてきたけど、これならナイフ一本で充分だな。

ボーヤ、そんな怖がる事はない。すぐに楽にしてやるよ」

男は気色悪い笑みを浮かべ、少しずつ二人に迫る。

守人は恐怖で、震える事しか出来なかった。そんな守人の背中に、優しく掌が当てられた。

「守人君、逃げて……………」

その言葉に、守人は愛菜に振り返った。

「怪我する前に、早く逃げて！」

「で、でも……………」

「早く逃げて！早くしないと、あいつが来ちゃう！」

守人は再び前を向いた。男は更に距離を縮め、煽あおるようにナイフを動かしている。

に、逃げたい。でも、そしたら愛菜お姉ちゃんが死んじゃう。それに、孝明お兄ちゃんとも、約束したんだ。でも、怖い。僕じゃ、

何も出来ない。声が、声が出ないよ。

「守人君、私は良いから早く、逃げて……………」

愛菜の掠れた声は、ほぼ届いていなかった。声が小さ過ぎたのではない。守人はそれほど、恐怖に陥っていた。

男はもう、数メートル前まで来ていた。

「守人君、早く！」

「あ、や……………」

完全に無防備な二人に、男が迫る。

「ふふ、大丈夫だよ、そんな心配しなくても。ちゃんと二人とも始末してあげるからねえ」

「どうしよう、僕が、僕が守らなきゃ。でも……」

「守人君！」

ついに、男は守人の目の前に立った。

「ふふ。おや、随分と可愛い女の子だったんだな。だったら、殺さないで遊んであげても良いぞ？もちろん、奴隷としてな」

男は余裕の表情で見下ろしてきた。

「まずは、ボーヤ。君の始末からだ」

「い、あ……」

「やめて！」

愛菜が叫んだ瞬間、男はナイフを光らせ、腕を振り上げた。

「さらばだ、ボーヤ」

守人の恐怖心が、頂点に達した時だった。

その瞬間、男の体が横に吹っ飛んだ。換わって守人の前にいたのは、肩で息をする孝明だった。

「孝明君……」

「孝明お兄ちゃあん！」

「守人、まだ愛菜を見てろ」

そう言い、孝明は男に近寄った。孝明の目は、本気の日だった。

男は立ち上がると、ナイフを構え、孝明を威嚇した。しかし、孝明は恐れず男に突っ込んでいった。

その時、ナイフが孝明の左腕に刺さり、孝明が一瞬だけ声を上げた。しかし、孝明が怯んだのは一瞬だけだった。孝明は右手の拳を男の顔面に叩き付けた。男は堪らず、後ろに倒れた。

孝明は全く男を恐れていなかった。孝明は男に駆け寄ると、左腕に刺さっていたナイフを抜き、何とそれを倒れている男の腹に躊躇無く突き刺した。

「ぐあ、があああああ！」

「この野郎！」

孝明は馬乗りになると、右腕で何度も殴り付けた。何度も、何度も。

そして男は、動かなくなつた。愛菜と守人は、その光景を見て固まつていた。孝明は息を乱し、左腕を押さえてふらふらと二人の方に戻つてきた。

「孝明、君……」

「はあ、はあ……これしか、無かつたんだ」

孝明は呟くように言った。そして、かなり痛みを堪えているようだった。傷を押さえている右手に、かなり力が入れられていた。

「あ、守人！」

その声に、守人ははっとした。そして孝明の顔を見るなり、顔を悲しげに染めた。そして、泣き始めた。

そうだ、僕が呼ばなかつたから、こんな事になつたんだ。孝明お兄ちゃん、きつと怒るだろうな。

しかし、その瞬間守人の小さな体は孝明に抱き寄せられた。

「え……」

「守人、よく頑張つたな。怖かつたよな。声なんて出なかつたよなでも、もう大丈夫だ。もう、大丈夫だからな……」

守人はやはり、何も出来ずに泣き続けた。愛菜も上体を起こし、守人と孝明を見詰めていた。守人は、大きな声を上げて泣き出した。

「孝明お兄ちゃん、怖かつたよお！」

「よしよし、もう泣くな。本当によく頑張つたな。よくやつたぞ、守人」

「ぼ、ぼ、僕、声が……」

「大丈夫だ、お前はちゃんと愛菜を守つただろ。ほら、お前の名前は『守人』って書くんだろ？お前の『守』っていう字は守られるの『守』じゃない。人を守るの『守』だ。お前はもう立派な奴だぞ。だからほら、もうそんなに泣くな。好きな女の子に振られちゃうぞ？」

「す、好きな女の子なんていないもん……」

守人はやつぱり泣きながら、少しだけ自信の付いた笑顔を見せた。それを見た孝明と愛菜は顔を見合せて笑った。

「た、孝明くん！早く戻ってきてえ！」

その時、茂みの方から一際高い声が聞こえた。

「あつ、やべ！茜を置いてきたままだった！ちよ、ちよっど行つてくる」

孝明は慌てて立ち上がり、茂みの方へ走っていった。

「守人君」

「え？」

守人は呼ばれて、愛菜に振り返った。愛菜は目が合つと、ニコッと笑顔を見せた。

「有難うね、守ってくれて」

守人はその言葉を聞いて、暫く固まっていた。そしてはっとすると、照れ笑いをして頷いた。

「うん。僕も男の子だよ！」

愛菜はその返事を聞いて、また笑顔になった。守人も涙を拭いながら、無邪気な笑顔を見せた。

「あ、帰ってきた」

茂みの方から、孝明と背負われた茜が戻ってきた。

第四章 愛菜

その男は、頂上にある建物から、島を見下ろしていた。そして手に持っている資料に視線を落とすと、ふっと怪しい笑みを浮かべた。「まさか生き残っているのが、子供四人とはな」

その資料の中には、ついさっき部下から届いた彼等の写真だった。必死に逃げようとする四人の姿が映っていた。

「しかもこの子は……それに、他の三人もか。ふふ、神とは面白い事をするのだな」

その男は再び笑うと振り返し、並んでいる部下に命令した。

「この四人を、一刻も早く捕獲しろ！良いか、あくまで捕獲だ。殺してはならん」

「はっ！」

部下は返事をし、さっと屋上を下りていった。

まさか、こんな「奇跡」が起こるとはな。森野^{もりの}、お前の子供は、今度こそ命を落とすだろう。クク、せいぜいあの世から見守っているが良い。

ふらふらと倒れそうになる守人を、後ろから孝明が押した。

「ほら、守人。頑張れ」

「も、もう限界だよ……」

急な坂道を上りながら、四人は生きる術を探していた。

守人は限界の体力で一生懸命足を進め、足の痛みが引いた茜は自力で歩き、替わりに孝明の背中には愛菜がぐったりとしていた。

「愛菜、大丈夫か？」

「う、うん……」

辛そうな表情をしている愛菜を見て、孝明はまた一步強く上った。やばい、早くしないと愛菜が危ない。もうだいぶ時間が経ってし

まっている。かなり急がないと。

三人の足はもう、悲鳴を上げる寸前だった。

その瞬間、激しい銃声が耳に入った。

「えっ？」

「まずい！見つけた！」

気付いた時には、遅かった。右、左とこちらに銃を構えた人間がいた。妙なヘルメットをしていて表情は分からないが、恐らく二人とも男だ。

「そこを動くな！」

「大人しくしろ。でないと痛い目に遭わせるぜ」

孝明は左右を見回しながら、愛菜をそっと励ましていた。守人は孝明にぎゅっとしがみ付き、茜はさっきの銃声で腰が抜けてしまったのか、座り込んだまま動けずにいた。

「良いか、絶対にそこを動くな！」

右側の若い声の男はそう言うと、一歩ずつゆっくりと四人に近付いた。

「た、孝明君どうしよう」

「ぐっ、くそ……」

銃を向けられている以上、下手に動けば撃たれてしまう。しかし、早くしなければ愛菜の症状はどんどん悪くなってしまう。

一人の命と、全員の命。四人には、この選択肢しか無かった。

「何で、何で俺達が」

「黙れ」

その瞬間、孝明の額に銃口が突き付けられた。同時に、孝明の戦意は恐怖に押し潰されてしまった。

「自分の立場を分かっているのか？お前達は黙って指示に従え」

その言葉を聞いて、孝明は疑問が浮かんだ。

「指示に従う？」

「そっだ」

「俺達は、殺さないのか？」

「ああ。上からの命令だ」

そう言われ、男に銃を突き付けられたまま孝明はもう一人の男に両腕を封じられた。

孝明達は、結局反抗すら出来なかった。腕を縛られ、二人の隊員にどこかへ向けて連れられていく。

その途中で、孝明の後ろに何かが寄り掛かってきた。

「孝明君……」

それは、もう完全に気力を失っていた愛菜だった。

「愛菜、大丈夫だ。絶対に俺が……」

「ぐずぐずしていないでさっさと歩け！」

もう一人の太い男が、繋がっていたロープを強く引っ張った。その所為で孝明は前にふらつき、愛菜は再び孝明の背中にぶつかかった。孝明は男を睨み付けながら、しかし抵抗出来ずに歩き続けた。

絶対、絶対に逃げ出してやる！

四人が連れ出された場所は、高いビルのような建物だった。入口から見上げると、とてつもない高さだった。

「こ、これは……」

その建物は、船で見たあの建物と同じものだった。この得体の知れない島にポツンと聳え立つ、唯一の建物。

「うわっ！」

その瞬間、突然頭から袋を被せられた。周りは見えないが、他の三人も同じ事をされたようだった。

「ほら、さっさと来るんだ！」

四人は無理やり連れられ、中へと入っていった。途中で、何かエレベーターのようなものに乗ったらしく、別の階へ連れていかれた。途中で何度も話し声が聞こえるが、内容はよく分からない。意味の分からない言葉ばかりで、全く理解出来ない。

五分程度歩いた時、ドアが開かれる音がした。そして、音のした

方向へどんどん進んでいく。恐らくドアの反対側へ行つたのだろうと思つた瞬間、四人はその場に倒されてしまった。

「痛っ！」

「きゃあ！」

「くそ、何しやがんだよ！」

すると、パツと手錠が外された。更に袋も取り外された。視界が広がり、周りの景色を確認出来た。

洋館の広間のような、広く綺麗な部屋。そして正面には、よくテレビなどのドラマで見えるような、社長が使うような机があった。その奥には、まさにその社長椅子と言つのだらうか、大きな椅子に座っている男がいた。

「ここ、どこ？」

「な、何だ……？」

その男はこちらを見て、怪しい笑みを浮かべた。男はいかつい表情をしていて、威圧感のある顔をしていた。恐らく、年齢は五十歳にいくか、いかないか程度。

「ふん、よくぞ生きていたな、我が息子達よ」

「誰だ、てめえ？」

その瞬間、横にいた隊員に腹を思い切り蹴られた。

「ボスにそんな口を聞くな！」

「まあまあ、放っておいてやれ」

「うっ……！！」

孝明は一瞬呻き声を出し、その場に倒れてしまった。隣にいた茜は、すぐに駆け寄つた。

「た、孝明君、大丈夫？」

茜が背中を摩さすっている間も、孝明は酷く咳き込んでいた。あの蹴りは、格闘家のように相当強いものだった。そして男は、再び話し始めた。

「そして、お前が森野の息子か。その弱つた小娘よ」

男の視線は、何と愛菜に向けられていた。

「わ、私が………?」

愛菜は既に返事をするのも大変そうだった。

「そうだ。あいつは、森野は本当によく働いてくれる男だった。ふふ、自らの命と我が子を失うようでもね」

「だ、誰だよ!」

その声を張り上げたのは、孝明だった。

「その森野とかいう人は、一体誰なんだよ!」

「貴様、またボスに向かつて!」

「まあまあ、放っておけ。どうせ後で用済みになるだから」

男は咳を一つすると、孝明の疑問に答えた。

「森野よしたか義孝。とても優秀だった、私の部下だ。そして………」

男は、すつと愛菜を指差した。

「その子の、父親だ」

「な、何………?」

反応したのは孝明だったが、愛菜も表情が変わっていた。

「そして、君達三人は………」

男は再び気色の悪い笑顔を覗かせ、口を開いた。

「他にもない、この私の子供だ」

「なっ………!」

その場の空気が、一瞬にして固まった。孝明、愛菜、守人、茜、四人の繋がりは、この男から始まっていた。

しんとした部屋。その空気を破ったのは、この少年の声だった。

「ぶっ………」

「む?」

「はっはっはっは、あはははははは!」

突然笑い出したのは、孝明だった。

「何がおかしい?」

「はは、何言っただ、このジジイ。そんなの信じる訳ねえだろ。

嘘を吐くにも程があるぜ。小学生よりも下っ手くそな嘘だな。はははははは!」

孝明は嘲笑うように声を上げていた。もちろん、半分位は無理を
して笑っていた。

「なら、証拠というものをみせてやるうか？」

「おう、見せてみるよ！」

孝明はわざと強気な笑みで応戦した。

「名前を当ててみせよう。お前達の名前は、右から孝明、茜、守人、
陽奈だ」

「は？」

「どうした、反論でもあるのか？」

そう訊く男に、孝明は自信満々で答えてみせた。

「いやあ、反論たつぷりだわ。誰だ、『ハルナ』って」

「そのの、弱り切った娘だ」

それは当然、愛菜の事だった。唯一、愛菜の名前だけは出てこな
かった。

「何言つてんだ。こいつは陽奈なんて名前じゃねえ。愛菜だ」

「そうか、愛菜と名付けられたのか……………」

「はあ？ついに開き直ったか？」

余裕で答えていた孝明は愛菜の方を見た。

「だよな、愛……………」

その時、孝明は一瞬困惑した。愛菜は下を向いたまま、何とも言
えぬ表情で黙っていた。

「おい、そうだろ愛菜」

「愛菜？」

「愛菜お姉ちゃん、どうしたの？」

愛菜は目を閉じて、額に手を当てた。

「……………分からない」

「え？」

愛菜は目を開けると、三人の方を見て言った。

「この人の言う事は、間違っていないかも知れない……………」

「はあ？どういう事だよ」

愛菜は再び俯き、胸に手を当てた。

「私は、記憶喪失なの……………」

「え!」

「き、記憶喪失?」

その時、ふつと笑い声が聞こえた。笑ったのは、あの男だった。

「あ、愛菜!何で隠していたんだよ!」

「ごめんなさい、こんな事になるとは、思わなかったから……………」

愛菜はまた手を額に当て、考えていた。孝明の表情には、徐々に焦りが募り始めていた。しかし、ふつと男を睨み、声を荒げた。

「でも、証拠にはならねえだろ!あくまで可能性じゃねえか!」

「可能性では、足りない。証拠を出せ、と」

「そうだ」

すると男は立ち上がり、孝明の首元を指した。

「それなら、そのペンダントが証明している」

男が指差したのは、孝明の首に掛かっているあのペンダントだった。

「それを君が持っているのは理由がよく分からないが、それが理由の一つだ」

「あ?何で愛菜の証明に、俺のペンダントなんだよ。俺と愛菜は赤の他人だ!」

「じゃあ聞くが、君はどうやってそのペンダントを手に入れたのかね?」

孝明のその質問に、少し戸惑った。何故なら……………」

「そのペンダントは、君の物ではない筈だ」

「……………ああ、その通りだ」

それを聞いて、茜が孝明に詰め寄った。

「た、孝明君」

「大丈夫だ、茜。心配すんな」

孝明は茜の頭にポンと手を置くと、視線を男に戻した。

「俺がこれを拾ったのは、五年前だ

」

俺の住んでる所には、低い山があった。その山の上には色々な施設や広場があつて、そこは施設の道具を借りてスポーツなどが出る場所だった。そこでバスケットをする為に、俺はあの日その山に登った。

夕方頃、突然に雨が降ってきた。俺は傘を持って来てなくて、暫くその施設で雨宿りをしていた。しかし、雨はどんどん勢いを増し、止みそうにはなかった。俺はまだ九歳だったから、早く帰らなきゃと思ひ、仕方なく雨の中その山を下った。

その途中の事だった。少し急な坂道を下っている中で、人の声があった。それは悲鳴のような声だった。俺は声のした方に走り、横の崖下を見下ろした。暗くてよくは見えなかったが、明らかにそれは人だった。

「おい、誰かいんのか!」

すると、その人は顔を上げた。

「大丈夫か! 返事してくれ!」

「た、助けて!」

掠れた、女の子の声だった。俺は一人では助けられず、さっと立ち上がった。

「そこで待ってて! 今助けを呼んでくるから!」

俺はそう言い、施設へと再び折り返した。

大人の人を呼び、何とかその子を助ける事が出来た。その子は俺よりも少しだけ背が高く、可愛いというよりは綺麗という感じの女の子だった。その子はお礼を言うのと、急いでいるらしく名前も言わずに行ってしまった。俺も早く帰りたいから、その施設の人達にお礼を言つて帰ろうとした。

その時、彼女の落とし物に気付いた。それが、このペンダントだった。

孝明が話し終わると、男はなるほどと目を閉じた。

「確かに、これは俺の物じゃない。でも、落としたのは愛菜じゃない。違う女の子だ。このペンダントは、愛菜の物じゃ……………」

「そのペンダント、開いてみる」

男はペンダントを指差し、そう言った。

「ひ、開く？」

「裏側に、形に沿って円い線があるだろう。爪でも引っ掛ければ、すぐに開く筈だ」

孝明は男をじっと睨んでいたが、恐る恐るペンダントをひっくり返した。

そこには確かに、円い線がある。

「これが、証明になるってのか？」

「とにかく、開けてみる」

孝明は唾を飲み込み、ゆっくりとそのペンダントを開けた。

頼む、何もあるな……………！

そこには、英語の文字と、二人の女の子が映っている写真があった。

「何だ、これ……………」

その英語を読んでみた。英語はよく見ると、ローマ字になっていた。

「『AKINA・M』？これ、『アキナ』って名前だった事か？」

「そうだ」

孝明は顔を上げた。男はまるで、それを知っているかのような口振りだった。

「でも、また違う名前じゃねえか！残念だったな！」

「それは違うな」

男は突然、ポケットを探り始めた。孝明はそれを見て、さっと身構えた。

「ふっ、銃ではないよ」

男は何かを取り出し、孝明の前に投げた。孝明は男を警戒しながら、それを拾った。

「それが何か分かるかな？」

「……月の、飾りか？」

「そうだ、三日月の飾りだ」

その月の飾りは、孝明の持っているペンダントと同じような素材で出来ていた。そして、紐が何かを通すような小さな穴が上の方にある。

「それも、本のように開くだろう。開けてみる」

孝明は少しずつ焦り始めていた。もしかしたら、こいつの言う事は、本当かも知れない。そう思い始めてしまった。

月の飾りは、パカッと素直に開いた。そこには、孝明の持っていたペンダントと同じ写真が飾られていた。そして、同じくローマ字が並んでいる。

「さあ、そこには何と書いてあるかな？」

孝明は、その文字を見たまま固まっていた。そんな孝明に、愛菜が声を掛けた。

「孝明君、何て書いてあるの？」

孝明はゆっくりと愛菜に振り向いた。愛菜はその表情を見て、少し不安になった。

「さあ、読んでみる！」

「……『HARUNA・M』って」

「えっ……！」

四人の固まる状況を見て、男はクツと笑った。

「ご覧の通りだ。その二つのペンダントは、先程の森野義孝が娘に作った物だ。太陽と月。その二つは対になっている。その月のペンダントはその子、陽奈の物、太陽のペンダントは、その子の姉、明あき

菜という女の子の物のだ。その子は記憶障害だから、姉を知らないのも無理はない。反論は出来ないだろう」

「ま、待て！」

孝明はさつと振り向き、男を指差した。

「確かに、このペンダントは、その姉妹の物かも知れない！でも、愛菜とその陽奈って子が同一人物っていう証拠はどこにあるんだ！」

「証拠、証拠って、君は裁判に出る弁護士か？」

「うるさい、ごまかすな！それに、何で突然姉が出てくるんだ！おかしいだろ！」

「本当におかしいかね？」

男は余裕の笑みを浮かべ、説明をし始めた。

「じゃあ、その写真に写っているのはその子じゃないのか？」

孝明はその言葉を聞き、はっとした。そして、写真を確認する。

「そして、あえてもう一つ言わせてもらおう。君がペンダントを拾った時に助けた女の子とは、そこに写っているのではないか？」

孝明は、写真を見たまま動かなかった。その表情は、両親の死を確認した時と同じ顔をしていた。そんな孝明に、愛菜が必死に声を上げた。

「孝明君、違うんでしょ？違うって言うて！」

孝明はそつと愛菜に振り向いた。孝明はもう、反論出来なかった。そこに写っていたのは、綺麗な花畑をバックに楽しそうな笑顔を見せる、幼き日の愛菜と、孝明が助けた少女だった。

第五章 計画

孝明は齒を食い縛り、俯いていた。目の前にいる一人の男と、偶然出会った少女の境遇、そして、自分が拾ったペンダントの運命によつて。

「どうやら、認めるようだな」

「っ……っ……！」

孝明は負けじと顔を上げた。が、言葉が返せない。今聞かされた真実を認めるしか、選択肢は無いのだ。

「さあ、更に衝撃の事実を知らせてやろう」

「ふ、ふざけるな！」

孝明は男の目の前まで近付き、全力で睨み付けた。

「勝手な事べらべらと喋りやがって、第一てめえは誰なんだ！」

すると、男はおどけたような反応で驚いた。

「おっと、これは失礼だったな。私の名は種子野憲正たねのりまさ。この島で俗に言うボスであり、君達の父親だ」

「お前、もういい加減に……！」

「ふっ、違つという理由はあるのかね？」

「黙れ！」

孝明は睨み付けたまま、心の中では殴りたいのを必死に堪えていた。これ以上、この男の言葉を聞きたくない。

ふざけんな。愛菜がこんな奴の部下の娘で、俺達がいいつの子供だと？

「じゃあ聞こうか。君達の親は……」

男は後ろの茜と守人にも視線を流し、最後に孝明を見た。

「本当に血の繋がった家族かね？」

「っ……っ……」

孝明は怯んでしまった。茜と守人も、はっとして焦り始めた。

男は椅子から立ち上がると、窓の外を眺めながら、三人に棘を刺

していく。

「君達の共通点を言おう。それは、家族と血が繋がっていないという事だ。それもその筈、私が父親だからだ。まあ、ここで全員に会う事は偶然だったが……大きく変わったな」

「黙れ！」

孝明は種子野の前に回り、胸倉を掴んだ。

「お前が俺達の父親だと！ふざけんな！何の根拠があるんだよ！」

「もちろん、私の子だからだ。じゃあ聞くが、君達の血液型は？」

孝明は暫く睨んでいたが、さつと振り返り、茜と守人を見た。

「茜、お前は！」

「わ、私は、B型だけど……」

その言葉に、孝明と守人は僅かに反応した。

「そ、そうか。守人」

「び、B型……」

「くっ……」

「た、孝明君は？」

茜が不安を募らせながら訊いた。

孝明の答えには、少し間があった。

「俺は……」

「B型だ」

その低く冷たい声を聞き、前に向き直った。男が冷笑を浮かべていた。

「凶星のようだな、孝明。まあ、私と妻がどちらもB型なのだからな」

「俺の名前を呼ぶな！それに、俺は違い！俺はA型だ！」

「ふん、その威勢が、どこまで続くかな？」

「この野郎……！」

孝明は怒りが最高潮に達した。瞬間的に、右手の拳を振り上げた。

「孝明君！」

「孝明お兄ちゃん！」

しかし、孝明の拳は止まらない。

ところが、孝明の体が突然、宙返りをした。孝明には、現状が分からなかった。気が付くと、思い切り地面に叩き付けられていた。

「ぐああっ！」

見事な、完璧な身のこなしだった。種子野は殴り掛かった孝明を、掌の上で遊ばせていたかのように、いつも簡単に投げ飛ばしてしまっただ。

倒れる孝明に、他の三人が駆け寄った。

「孝明君！しっかりして！」

「孝明お兄ちゃん大丈夫？ねえ大丈夫？」

すると孝明はさつと上体を起こし、守人の頭を撫でた。

「大丈夫だ。心配すんな」

「さて、時間だ」

そう呟いたのは、種子野だった。

「私の子供達を、連れて行け。それから、陽奈はあの部屋へ連れて行け」

「はっ！」

そう返事をする、部下達は再び孝明達を拘束した。

あまりの力に、抵抗も出来ない。

「待て！愛菜だけ違う、『あの部屋』って、愛菜に何をするつもりだ！」

「ふっ、それは君達の目で確かめたまえ。では、連れて行け」

「はっ！」

「おい、待て！ふざけんな！」

孝明の必死の叫びも空しく終わり、再び袋を被せられると部屋の外へと連れ出された。

一人取り残された愛菜は、怯えた表情で種子野に振り返った。その種子野は、いままでに無く冷酷な笑みを浮かべていた。

「さあ、ここからだよ……」

孝明、茜、守人の三人は、暗い地下にある檻の中に閉じ込められてしまった。

「くそつ、出せ！」

「やめて、出してえ！」

三人の声に反応する事も無く、部下達は檻の前から姿を消してしまった。孝明は悔しさを噛み締め、拳で檻を強く叩いた。

「くつ、何で、何でこんな事に……………」

孝明は表情を歪め、座り込んだ。

「愛菜、無事でいてくれ……………」

愛菜は目隠しもされず、ただ手錠だけを付けられて連れて行かれた。不気味な廊下、階段を進んでいく。どうやら、どんどん下へ向かっているようだ。

最終的に、幾つフロアを下りたか分からない程深い地下にある、謎の扉の前まで連れて来られた。

そのフロアは階段、もしくはエレベータを下りると、そのドアに向けた一本の道しか無かった。つまりこのフロアには、あの扉の部屋しか無いのだ。

愛菜は種子野と部下に連れられ、その部屋へと足を踏み込んだ。

その部屋の電気が点いた途端、愛菜目を丸くした。

「こ、こは……………」

その部屋はドームのような構造になっていた。中央に硬そうなベツドがあり、その周りには到底意味の理解出来ない、不思議な機械が並べられていた。

何だろつ、この違和感……………」

「ここがどこだか分かるかね？」

「分からない。でも、何か……………」

「まあ、何かを感じるのは当たり前だろう。ここは今の陽奈の記憶では、最も古い記憶の場所であるからな」

「えっ！」

愛菜はさつと首だけを種子野に向けた。種子野は気持ちの悪い笑顔を浮かべ、愛菜の方を見てきた。

「正確に言おうか。ここは、陽奈が記憶を失った場所……」

「そ、それって！」

「いや……記憶を、奪われた場所だな」

その瞬間、愛菜は背筋が凍り付くような恐怖心を覚えた。種子野の表情が、今までに無い位楽しそうに微笑んでいるのだ。愛菜は怯み、口が動かなかつた。

「さあ、陽奈。お前にだけ、本当の事を教えてやろう」

ほ、本当の事……？

種子野は部屋の中央に向き直り、突然話を始めた。

「今揃った四人の子供、陽奈、孝明、茜、守人。この四人がこの島へ来たのは、実は偶然でも奇跡でも何でもない。私の計画なのだ」

「け、計画……？」

「そうだ。お前達は持っていた船のチケットでこの旅行に来たのだろう。だが、それは私達が計画したものだ。私は数年前からお前達がいるという東京に部下を送り込み、情報を集めた。そして、全員の居場所を突き止めたのだ。そして私は計画を実行した」

「私達を連れてくる計画って、じゃあ他の人達は？」

愛菜はついに体力が限界なのか、声が掠れていた。

「そんなもの、ただの犠牲だ。私は計画の為なら、何人だって殺せるぞ」

「そ、そんなこ……」

その時、愛菜の体がガクツと倒れた。後ろにいた部下達が何とか腕を持って支えたが、愛菜がぐったりとして、一言も喋らなかつた。「もう限界だったか。まだまだ真実は半分も語っていないのに。まあ、それは後で良いだろう」

種子野は愛菜の前にしゃがみ込むと、その頬を大きな右手で掴んだ。

「ふふふ、残念だったな。森野」

立ち上がり、種子野は部下達に命令を下した。

「さあ、準備を始めろ！」

「はっ！」

部下達がそれぞれ動き出した。愛菜は中央のベッドに寝かせられ、手足を機械に押さえられた。

ドアを開き、モニター室に入った種子野は、自信に満ち溢れた表情を見せた。

「さあ、始まりだ………！」

あれから数時間が経った。しかし、一向に愛菜は戻って来ない。

それどころか、この檻のあるフロアに、隊員一人すら来ない。階段から足音はするが、この階には入って来ないのだ。

「はあ、いつまで、私達閉じ込められてるんだらう」

「僕お腹空いたよう………」

茜と守人は溜息混じりにそう漏らした。黙っていた孝明も、正直苦痛だった。

「孝明君、どうしたら良いの？」

茜は一人外側で俯く孝明に、そう問い掛けた。

「茜、静かにしろ」

「孝明君、どうしたの？」

「今必死に考えてんだよ！」

孝明は俯いたままの状態で叫んだ。その声に、茜は圧倒されてしまった。

「孝明お兄ちゃん、茜お姉ちゃんが可哀想だよ！」

守人の言葉に、孝明は彼を見た。そして冷静に状況を見直すと、落ち込んでしまった茜の方に視線を向けた。

「うん。茜、ごめん」

そう謝ると、茜は笑顔を見せた。

「ううん、良いよ。私もごめんね」

「まあ、しょうがない。皆ここ数日何も食べてないし、きっと頭がよく働かないんだ。ストレスも溜まってるし、イライラするのも当たり前かな」

「・・・それ言い訳？」

「あ、いや、俺だけじゃなくて、茜と守人も、それに愛菜も・・・」

孝明は愛菜の顔を思い浮かべた。

愛菜は初めて船で会った時から、仲良く話してきてくれた。話す時のあの笑った表情が、凄く印象的だった。

あの男が言っていた関係は、よく分からない。でも、俺が皆を助けるのには、理由はいらぬ。

絶対に、四人でここを脱出する！

「三人とも、起きてるか？」

その声に、はっとして振り向いた。

そこには、一人の隊員がいた。体型と声に覚えがあった。捕まった時の、若い声の方の人だ。改めてよく見ると、だいぶ背が高い。

「な、何だよ、殺す気か！」

「腹減って警戒心高まってるみたいだな。ほら、これ」

その男は突然、柵の間を通して檻の中に袋を三つ入れてきた。

孝明は瞬間的に距離を取り、注意を払った。茜も孝明に近付き、守人はその後ろに隠れた。

「な、何をした！」

「そんな警戒するな。これはパンだよ。あ、一人一袋な」

「う、嘘吐け！どうせ毒か何か入れてるんだろ！」

孝明は決して近付こうとはしなかった。その反応を見て、男は肩を揺すった。

「流石に飯は問題無しだ。いくら異常な殺人馬鹿共とはいえ、空腹

の辛さは一緒だ」

異常な殺人馬鹿共……？

「孝明君、もしかしたら、この人そんなに悪い人じゃないかも……」

茜が恐る恐る耳元で囁いてきた。その言葉に、孝明はゆっくりとその袋に近付いた。

「ほ、本当にただのパンなんだろうな？」

「ああ、パンだ。卵のやつあるけど、アレルギーとか無いかな？」

「そ、そんな心配されたくねえ！」

「ははは、良いから早くその腹の虫を抑えろって」

男の表情は分からないが、本当にただ笑っているような気がした。孝明はその様子を見て、袋をさっと取った。そして、中身を確認する。

「な、パンだろ？」

「………ああ」

「ほら、食べ。飢え死にするぞ」

「なっ、銃で大量に殺戮さつりくするような奴等に言われたくねえ！」

また男は肩を揺すって笑った。孝明は一つパンを取り出すと、毒味覚悟で一口かじってみた。

「ほら、普通のパンだろ？」

「………パンだ」

「な。俺は、お前等を見殺しにはしないよ」

「え？」

男は立ち上がると、さっと振り向いてしまった。

「また来る」

男はそう言い残し、そして、すぐに姿を消してしまった。見殺しにはしない？俺は、だと………？

「あの男、一体………」

「た、孝明君」

「ん？」

孝明は顔を上げると、そこには目を輝かせる茜と守人がいた。

「パンちようだい、パン」

「あ、ああ」

孝明は自分の分の袋を置き、残りの二つを茜と守人に渡した。その匂いに感動したのか、守人は長い溜息を漏らした。

「四つ位入ってるみたいだぞ」

「わーい！頂きまあす！」

「頂きます！」

茜と守人はすぐにパンを取り出すと、口を大きく開けてかじり付いた。孝明もさっきのパンを、また一口食べてみた。

「おいしいね、守人君」

「うん！」

茜の言葉に、守人が嬉しそうに頷いた。本当にお腹が減っていたのか、茜も凄い勢いで食べ、守人は両手にパンを持って食べていた。その様子は見た孝明は、少しだけほっとした。

十分もしないうちに、三人は全てたいらげた。

「凄くおいしかったね！」

「元気出てきたよ！」

「そんなはしゃいでる場合じゃねえぞ。今は、とにかく何かを考えないと」

孝明はとりあえず、この檻からの脱出を考えてみた。

檻の中はほぼ五メートル四方程度の面積で、高さは二・五メートル位。壁に穴や窓は無く、出口は目の前の鉄柵だけ。そこは十センチ程度の間隔があるが、特に役には立ちそうに無い。そして、扉の部分には頑丈な鍵が掛かっている。

「とりあえず、この状況をどうにかしないとな」

「三人で何か考えてみようよ」

三人は脱出方法を考え始めた。しかし、道具も何も無い孝明達には、アイデアすら浮かばない。

「何も浮かばねえな」

「ああ……」

その後、三人の会話は無くなった。一人幼い守人は、茜の膝を枕にぐっすりと眠っていた。しかし孝明と茜は、愛菜とお互いを心配して、寝ていなかった。

時折、目を合わせては再び俯くだけ。それだけで時間が過ぎていった。

「なあ、茜」

「ん？」

「お前も、寝た方がよいぞ」

「う、うん。でも孝明君も寝た方がよいよ。一番頑張ってたし」

「俺は男だから大丈夫だよ。このメンバーで一番頑張らなくちゃいけないのは、俺だしな」

「うん……」

茜は曖昧に答えてしまった。しかし、孝明の顔を見て、茜は話した。

「孝明君、あの時、私を助けてくれて有難うね」

「ああ、そんな事か。当たり前的事だよ」

「ううん、あんな混乱している時に、人の事を考えてくれる程優しい人は滅多にいないよ。本当に有難う」

「いや、そんな……」

女子とこんな会話をしたのは初めてだった。孝明は少し照れてしまい、頭を掻いた。

「孝明君、私、ここでもし死んじゃったら嫌だから、今言っておきたい事があるんだ」

「え、う、うん」

孝明はじつと見詰められていたので、少し緊張してしまった。そして茜も、少し緊張した様子で孝明を見ていた。

茜はなかなか言い出せずにいた。気を紛らわす為に守人の頭を撫でていたが、それでも言葉が見つからなかった。しかし、孝明はしっかりと黙って、茜が言いたい事を待ってあげていた。

「孝明君」

「うん？」

「やっぱり、寝て良いかな？」

「良いよ。ゆっくり休め」

「うん。じゃあ甘えるね」

そう言い、茜は毛布を肩まで上げ直すと、孝明に凭れ掛かり目を閉じた。そして二分後には、静かに寝息を立てていた。

孝明は茜が寝た後も、ずっと寝ようとはしなかった。眠くても何が起こるか分からないこの状況、必死に眠気を堪えていた。

三人に頼りにされる中、孝明は寝ている場合ではないと感じていた。

しかし、体の疲労は半端なものではなかった。次から次へと感じてくる疲れが、孝明を夢の中へと誘っていく。

最終的に孝明は、莫大な睡魔に負け、深い夢の底へと落ちていった。

孝明が目を覚めたのは、誰かに名前を呼ばれていたからだ。

「う、うん………？」

「孝明は起きたか。ほら、起きろ、茜」

半分寝ぼけていた孝明は、一瞬にして目が覚めた。

目の前に、あの男がいたのだ。

「わっ、あんた何やって」

「しいーっ！」

すると男は黙らせてくるように、人差し指を立てて言った。そして、小声で話し出した。

「早く二人を起こして準備しろ」

「え、な、何を？」

男は茜の肩を揺すりながら、孝明の質問に答えた。

「ばれないように静かに起こせ。ここを脱出するぞ」

「え？」

「

第六章 唯一の反逆者

目の前に現れた男を見て、孝明は固まった。それもその筈、この男は有り得ない事を言っているのだ。

「ど、どういう事だよ」

「どうもこうもそのままだ。脱出するんだ、この島から」

「ま、待ってくれ！」

孝明は男に向かって言った。

「脱出するなら、愛菜も助け出さないと！」

「分かってる。もう一人の子だろ。俺が助け出す」

男はそう言いながら、茜を起こし続けた。

この男、一体……

牢を脱出した孝明、茜、守人は、男と一緒に走り出した。

「良いか、ここは地下14階だ。そして、彼女が連れて行かれた部

屋は、地下30階だ。一度追い込まれたらもう逃げ出せないと思え」

「ち、地下30階？」

孝明達は思わず唾を呑み込んだ。

時々隊員が通る時はさっと身を隠し、通り過ぎてから再び走り出す。

四人はどんどん下へ向かっていく。エレベーターは鉢合わせる事があるので、階段で下りていく。

「あと数階だ。頑張れ」

男が三人を励ましながら、次々と階段を下りていき、とうとう地下29階まで来た。

その時だった。突然、雷が落ちたような轟音がした。

「な、何だ今の音！」

「まさか……」

男は何かに気付いたかのような様子だった。

「え？」

「まずい。皆、急ぐぞ！」

急いで地下30階に下りた。そして、突き当たりの扉に向かって走り出した。

扉を開けた瞬間、四人の目に映ったものは

ドーム状の部屋の中央にあるカプセルに、愛菜がぐったりと倒れていた。

「愛菜！」

孝明は愛菜の方へ駆け出した。しかし、その足元に銃弾が撃たれ、孝明は反射的に立ち止まった。

隊員が銃を構え、孝明の方に向けていた。

「う………」

「孝明！」

後ろから呼ばれた。茜、守人とあの男も付いてきた。

「大丈夫か？」

「あ、ああ」

「いや、君達はもう大丈夫ではない」

その声に、四人は視線を前に動かした。

そこには、種子野が不気味な笑みを浮かべて立っていた。部屋の明かりが全て点くと、周りは十人程度の隊員達で囲まれていた。

「まさか、あの機械を使ったのか」

「いかにも、その通りだ」

「な、何だその機械ってのは！」

「教える義務は無い」

種子野は暫く間を置き、急に怪しげに笑った。

「やはり、お前の仕業か。禎志^{さだし}」

「え？」

種子野は男を見詰めていた。孝明は男の顔を見上げた。

すると、男は突然マスクを脱いだ。それを見て、三人は驚愕した。男は、予想していたよりももつと若かった。まだ青年といった感じだ。それだけなら驚かないが、その表情が種子野に似ていたのだ。そして、どことなく、何故か守人に似ているような感じがする。

青年は種子野を睨み付け、口を開いた。

「お前を殺しに来たぜ。親父」

「えっ、親父？」

「お、おい！どういう事だよ！」

孝明は青年に向かつて叫んだ。青年は孝明を見下ろし、懐から他とは違う銃を取り出した。

「俺は植野禎志^{つねの}。あいつを殺す為にこの島で耐えてきた、唯一の反逆者だ」

「ふふ、いつかは来ると思ったよ。禎志」

「ふっ、そうやって笑っていられるのも今のうちだぜ」

「それはどうかな？」

強気な笑みを見せ、禎志は一步も引かない。

四人は、とにかく愛菜を救い出し、早くこの場を脱出しなければならぬ。しかし、愛菜が何をされたのか。禎志以外の三人には、到底予想出来なかった。

「お、おい、禎志」

「何だ、孝明」

孝明は愛菜を見詰めながら、禎志に問い掛けた。

「愛菜は、何をされたんだ？い、生きてるのか？」

「大丈夫だ。命を奪う機械ではない。ただ……」

「ただ？」

孝明が訊き直した瞬間、銃を構える音が聞こえた。種子野が二人に向けて、銃を向けていた。二人はさつと身構えた。

「禎志。それ以上喋ると命が無いよ」

「ふん、俺は死なな」

その瞬間だった。部屋中に幾つかの銃声が響いた。

禎志は孝明達と一緒に、物陰に隠れた。部屋にいる隊員が、一斉に銃撃を始めたのだ。

「あつ！禎志、腕が……」

「孝明、静かにしている！」

禎志の左腕から、血が流れていた。三人を物陰に隠そうとした時に、被弾してしまったのだ。

禎志は物陰に隠れながら、その違う銃で撃ち始めた。その射撃は、かなり正確だった。

隊員達の手当たり、血が飛び散る。それと同時に、次々と銃を落とす音が鳴る。

「俺の銃は自作レーザー銃だ。光だから銃弾なんかより速えぜ」

そして、ついに最後の一人を撃った。銃は拾われたが、利き手じゃない手で撃てる筈がない。禎志は立ち上がり、銃を構えた。

「観念しろ。俺は銃撃では負けない」

すると、突然拍手が聞こえた。拍手をしていたのは、種子野だった。

「ふっふっ、相変わらず良い射撃力だよ。それに、特製のレーザー銃を作り上げるとは、本当に機械いじりの好きな奴だ。実に惜しい人材だ」

「他の奴は殺さなかったが、お前なら躊躇無く心臓を撃ち抜けるぜ」

禎志は、その銃口を種子野に向けた。そして、一歩だけ下がった。

「おい、孝明」

小声で孝明の名前を呼んだ。しかし、孝明は反応していない。

「孝明、孝明」

禎志の呼び掛けに、孝明は全く反応しない。

孝明は、反応出来なかった。禎志は種子野の息子だと言った。そして、種子野が自分達に聞かせた話を事実とするならば、禎志は兄

という事になる。そして、目の前で行われている、この現実の銃撃戦。いつ殺されてもおかしくない。目の前で禎志は血を流しているのだ。

孝明の心は、混乱と恐怖に支配されていた。それは、茜と守人もそうだ。怖くて、指一本動かせない。

その状況を感じ取り、禎志は再び種子野の方に向いた。

「どうやら、俺が止めを刺さないといけないらしいな」

禎志がそう言った瞬間、孝明達も我に返る程の威圧感を放った。隊員達も怯み、壁際に下がった。

「ふっ、計算違いだったが、禎志。お前にチャンスをやろう」

「何？」

その瞬間、壁際から一メートルの地面から、突然ドーム状に光の壁が現れた。孝明達はその光のドーム内に包まれた。

「な、何だこれ！」

「孝明、触るな！これは超高压電流だ。触れば一瞬であの世逝きの電流バリアだ。とにかく大人しくしている」

すると、突然ドームに沿って隊員達が移動し、部屋を出始めた。

「おい、待てこの野郎！」

「ふっふ」

最後の種子野は立ち止まり、四人に振り返った。

「ここから脱出出来るかな？あまり時間は無いよ。ふっふっ……」

そう言い残し、種子野は部屋を出ていった。

禎志は最後まで種子野を見送る事もなく、中央のカプセルに駆け寄った。

「おい、孝明手伝え！この子をカプセルから出さぞ！」

「え、ああ」

孝明も駆け寄り、愛菜の救出を手伝った。

「こ、これ開かねえよ！」

「孝明、下がれ」

孝明が下がると、カプセルのカバーに向かつて禎志がレーザーを放った。派手な音を立て、超強化ガラスが砕け散った。

「よし、彼女を取り出すぞ」

破片で傷付けないように、愛菜を丁寧に救出した。ぐったりと意識は無いが、呼吸はしていた。

「よし、ここを出るぞ」

「って待てよ！ここからどう脱出するんだよ！」

「少し冷静になれ孝明。あと十秒だ」

「え？」

訳も分からないまま、十秒が過ぎた。すると、突然バリアが消えた。

「急げ！早く出ないとまた閉じ込められるぞ！」

「あ、ああ！」

禎志が愛菜を背負い、四人は部屋を脱出した。

「あれは一分間続いて、十秒のインターバルがあるんだ。獲物を捕獲する為にな。大抵ほとんどの部屋に仕掛けられている」

「へえ……」

「それと、ここからは俺の二メートル後ろを付いてこい。良いな？」

「二メートル？」

「そうだ」

「ああ、分かった」

エレベーターは使えないので、階段を駆け上がった。すると、上から大量の銃弾が降り注いできた。すると、禎志は孝明に愛菜を託した。

「お前等、良いって言うまでそこで待ってるよ！」

禎志は三人にそう言い、階段を少し上った。そして、上に向かって銃を連射した。

暫く射撃を続けると、禎志は三人に手招きをした。

「よし、来い！」

「おう！」

四人は再び階段を上がり始めた。

途中で隊員の待ち伏せに遭っては禎志が応戦し、邪魔者を倒しては再び駆け上がったいく。

しかし、途中に入る邪魔の所為で、なかなか地上に出られない。

「くそつ、何人いるんだよ！」

「戦闘部隊だけでこの建物内に三百人いる。島全体なら、千人はいる」

「そ、そんなにいるのか！」

撃退と上昇を繰り返し、何とか1階に出た。その時、出口の所に百人程の隊員がいた。

ここを突破しなければ、生きる道は無い。

「ここまで来てあんなに残っているなんて……」

孝明は右手をぐつと握りながら呟いた。その時、禎志が手で後退の合図をしていた。

「孝明、茜、守人。階段に隠れている」

「だ、大丈夫なのか？」

「心配するな。最低お前等を脱出させるまでは、絶対に死なない」

そう言い、禎志は射撃を始めた。孝明は茜と守人の目を押さえた。「茜、守人、見ちゃ駄目だ」

孝明は、意外にも冷静だった。前にも感じた感覚だった。この惨い状況を、二人の目に映してはいけない。状況を確認し、嫌な場面を記憶に残すのは自分だけで良い。

後方では激しい銃撃戦が繰り返されている。その中で、禎志は命を懸けて戦っている。それは、何の為なのか。自分の為か、三人を助ける為か、あの種子野という男への、何らかの復讐なのか。

とにかく今は、禎志を信じるしかない。

「孝明、茜、守人！」

その時、禎志の声が響いた。気が付くと、既に銃声は一つも鳴っていないかった。三人は階段を出て、禎志の元に駆け寄った。

「あっ、禎志、その傷……」

孝明はそれを見て、目を瞑りたくなつた。

禎志は所々から血を流し、さつきよりもかなり息が上がっていた。「気にするな。たかが二、三発掠っただけだ。それよりも、早く行くぞー！」

「い、行くつてどこへ！」

「とにかく、今は付いてこい！」

禎志に付いて、三人は駆け出した。その時、孝明は出口付近に倒れている隊員達を見た。

手や足を撃たれ、苦しそうに唸りながらもがいていた。辺りには生々しく血が飛び散り、銃撃戦の壮絶さを物語っていた。そこで孝明は、一つの事に気が付いた。

これは、どういう事だ？そういえば、地下の時も、階段を上がってくる時も、全員隊員達は苦しそうに倒れていた。いや、それは不思議な事ではないのだが……

孝明の疑問とともに、彼等は建物を脱出した。

右も左も無い山の中を、ただひたすら進んでいく。禎志は先頭で銃を構え、警戒しながら進んでいく。孝明が愛菜を背負い、茜と守人もその後ろに付いていく。

「なあ、これからどうするんだよ」

「孝明、大丈夫だ。俺は今ある一点に向かって進んでいる。だから今はなるべく音を立てずに付いてこい」

禎志は建物を出てから二〇分程度歩いた所で、突然立ち止まった。そこは崖下だった。しかし、それだけで辺りには何も無い。

「よし、辺りには誰もいないな」

周りを確認すると、禎志はポケットから携帯のような物を取り出し、スイッチを押した。

すると突然、崖の一部が動き出し、中に通路が現れた。

「ええ、何だこれ？」

「よし、皆入れ。すぐに閉めるぞ」

三人が入ると、禎志は自分も入り、扉を閉めた。そして、通路を進んでいった。

「ここにいれば暫くは見つからないだろ。レーダーにも反応しないように出来てるからな」

奥に一つ扉があった。扉の横の機械に禎志が触れると、ピツと音が鳴り、扉がスライドして開いた。その奥には、部屋があった。

「うわぁ……」

部屋に入った孝明達は、思わず感嘆した。

そこには四〇畳程の部屋が広がり、手前半分にはベッドや椅子、テーブル、冷蔵庫のような物があった。そして奥半分には、パソコンのような機械を中心に、到底意味の分からない様々な機械があった。

「とりあえず、その子をベッドに寝かせな」

「あ、ああ」

孝明は白いベッドに愛菜を寝かせた。そこで足を見た時、はっと思い出した。

「あつ、そういえば愛菜は蛇に噛まれたんだ！毒とかが回ってたら……」

「心配するな。毒じゃない」

「診てないのに分かるのかよ！」

「その傷を見る限り、かなり時間が経っている。もし毒だったら、とっくに死んでいる」

その言葉を聞き、孝明は一瞬怯んでしまった。そして、情けなさが込み上げ、俯いた。

すると、禎志は笑顔で励ましてきた。

「まあ、大丈夫だ。この島には毒を持つ動物はいないよ」

「本当？」

「ああ、だから心配しなくて良い。ただ、お前等も含めて体力が限界だな。ゆっくり休め。ほら、茜と守人も座って良いぞ」

そう言われると、茜と守人はその場にペタンと座り込んでしまった。一気に緊張が解けたのか、孝明も疲れをどつと感じた。

「この部屋はな、いつかこういう時が来ると信じて、俺が内密に造ってきたんだ。種子野も予想外だろうな。こんな逃げ道がるなんて知らないぜ、きつと。案外充実してるだろ？」

「東京にいる技術屋でも到底出来ないと思うけど……」

「ははは、そう言ってもらえると嬉しいよ」

禎志は初めて、楽しそうな笑顔を見せた。その笑顔を見て、孝明は少し安心した。

「なあ、禎志」

「ん、どうした？」

孝明は、少し躊躇した。しかし、顔を上げて質問をぶつけた。

「あの男、種子野が言った事は、全て本当なのか？」

「それか」

「もし本当なら、禎志は俺達の兄貴って事になるよな？」

禎志は暫く考えた。孝明はじつと禎志を見詰め、答えを待った。

茜と守人も気になり、二人の会話を聞いていた。

「本当に、聞きたいか？」

「ああ、聞きたい」

孝明の真剣な眼差しを見て、禎志はゆっくり頷いた。

「分かった。じゃあ話そう。俺と、お前達と、あの種子野という男。そして、この島の全てを。少しだけ長くなるが……」

それは二十年位も前の事だった。ある一人の男、種子野憲正という男がいた。何も無いただの男で、普通の女性と結婚し、子供も生まれ、平凡で幸せな日常を送っていた。

確かに、種子野という男は何も無かった。しかし、彼には過去に大きなトラウマがあった。彼はそのトラウマにずっと苦しめられていた。いつしか、彼はその記憶を消したいと言い出し、人体に関し

ての研究を始めた。

しかし、才能の無かった彼は、何も出来なかった。更に彼は苦しんだ。そんな時だった。

ある男と出会い、彼の人生は大きく変わった。その男は、森野義孝。人間の脳について研究しており、とても優秀な男だった。種子野は彼と手を組み、研究を始めた。

そこで、ある実験を行う事になった。記憶を消すという、種子野の願望である実験だった。しかし、東京ではそれを設置する場所が無く、色々な場所を探した。

見つけたのが、この島だった。早速機械を設置し、準備は万端だった。

しかし、実験は失敗だった。種子野の記憶は、まるで消えなかった。苦悩にぶち当たった種子野は、東京に戻り夜の街に消えた。そこで死ぬように飲んだ。そして、そこで一人の女性と不倫をしてしまい、更に彼女は子供を身籠ってしまった。しかも、子供は双子だった。

流石に二つの命は簡単に切り捨てられない。彼女はその双子を産み、その後事故で亡くなった。種子野は妻にその双子を知られたくなく、二人をそれぞれ別の保育所に引き取らせた。

その頃からかも知れない。種子野という男が、闇に染まっていたのは。

その後種子野は再びこの島に戻り、研究を続けた。そして、可能性の光を掴んだ。しかし、森野はもう諦め、研究を断念しようとしていた。

そこで種子野は裏切りに対し怒りを覚えた。既に闇に染まっていた種子野は、躊躇も無く襲い掛かり、彼を殺害した。見つからないように島のどこかに遺体を埋め、手先が器用で成績優秀だった息子を島に呼び出し、研究に戻った。

その頃、妻が何と二人目を妊娠した。そんな嬉しさとは裏腹に、種子野は冷や汗を掻くような事態に陥る。

殺した森野の家族が、彼からずっと連絡が無いと言ってきたのだ。少し焦った種子野だったが、すぐに裏の計画を立て、彼の妻と二人の娘を島へ呼んだ。

そこで、真つ先に妻を殺害し、下の娘を実験台に立てた。しかし、その実験後に種子野の本性を知った上の娘が、種子野の息子と協力し、下の娘を島から逃がす事に成功した。が、上の娘と息子は種子野に捕まり、その娘は実験台として弄ばれ、最終的に命を落としてしまった。

その時の二人の娘が、妹の陽奈、つまりは愛菜と、姉の明奈という二つ上の少女だった。そして、共に脱出を試みたその息子こそが、この禎志なのであった。

第七章 脱出開始！

話を聞き、孝明達は言葉を失ってしまった。禎志はそんな三人の表情を確認しながら、また話を続けていく。

「元々、俺は親父の事を信用していなかった。島へ協力に行った時も、俺は不信感しか持たなかった。そしてその通り、その時にもうあいつは動いていやがった。あいつは森野さんを殺し、その代役に俺を呼び出したんだ」

禎志は話をしながら、冷蔵庫から飲み物を出した。それをコップに注ぎ、三人に配った。

「その頃、お袋から子供が出来た、って連絡があつてな。俺は弟か妹が出来ると嬉しくて、一度東京に帰ろうと親父に言ったんだ。でも、親父は俺を帰してはくれなかった。しかもほぼ同じ時に、森野さんの家族が彼を心配して連絡してきた。その後の親父は、もう人間の目をしていなかった。森野さんの家族を呼び出し、計画に移ったんだ」

禎志はパソコン前の椅子に座り、一度大きく息を吐いた。孝明は飲み物を口にし、話に耳を傾け続けた。

「森野さんの奥さんが殺される時、俺はその娘だった、明奈と陽……愛菜か。二人と別の部屋で遊んでいたんだ。二人とも年下だったけど、凄く可愛くて、すぐ仲良くなれた。はつきり言えば……俺は、明奈の事が好きだった。初恋の相手が出来て、凄え嬉しかった。でも、一瞬にしてそれは崩れていった」

「愛菜が、手を付けられたのか……」

「ああ。奥さんを殺され、逃げ場を失った俺達から愛菜を奪い、その幼い記憶を消し去った。母親の死を知った俺達を、用済みにするつもりだったんだろうな。俺と明奈は何かして脱出を試みて、愛菜を逃がす事に成功した。その後明奈も逃がしたかったが、俺たちには万策尽きていた。あいつはわざと明奈を先に捕まえ、俺の目の

前で……」

禎志は俯き、右手を固く握っていた。その表情は、怒りと悔しさに満ちていた。

「俺は、明奈を守りたかった。いや、愛菜だってそうだ。あの二人を、あの汚い男の策略から守る事が出来なかった。あの時に、俺はあの男へ復讐を誓った。いつかこの手で、あいつを殺すまで……」

そう話す禎志は、孝明達が初めて見る表情だった。助けてくれた優しい恩人の、苦し過ぎる因縁に染まった表情。

孝明は飲み物を一気に飲み干すと、口を開いた。

「禎志は、殺されなかったのか？」

「もちろん、俺だって協力した身だ。明奈の死を見せられるだけでは、終わらなかった」

禎志はそう言うのと、立ち上がり、上の服を脱ぎ始めた。そして、その体が露わになった時、三人は言葉を失った。

禎志の左胸辺りに、直径10センチはある惨い傷痕があった。守人も茜も見えていられず、目を逸らした。孝明も口を押さえ、込み上げてきそうになる吐き気を必死に堪えた。

「これは、少しでかい銃弾で撃たれてな。この通り、背中まで貫通だ。俺は本当、死ぬかと思っただけだな」

禎志は背中 of 貫かれた痕も見せ、さつと新しい服を着た。

「でも、あいつのお遊び人形にされた明奈と愛菜に比べれば、こんな傷どうって事ねえ。二人の為にも、俺は意地でもあいつに復讐する」

禎志はそう言い切った。その言葉が、とても力強く聞こえた。

「それと、今の話の中に、お前達がいる」

禎志は三人の近くに座り、一度息を大きく吐いた。

「まず、奴の最初の子供は、紛れも無く俺だ。その次の、不倫相手との双子。それが、孝明、茜。お前達だ」

「え、俺と茜が双子？」

孝明と茜はポカンとしながら、お互いの顔を見詰め合った。

「ちなみに、孝明が兄で、茜が妹」

「あ、そういえば孝明お兄ちゃんと茜お姉ちゃん、似てるかも！」

「守人。そう言うお前は、俺の実の弟。つまり、話の最後に出てきた二人目の子だ」

「え？」

「弟をこの目で見られて良かったよ。凄く嬉しい」

守人は目をぱちくりさせながら、禎志を見上げた。禎志は守人の頭を撫で、穏やかに笑い掛けた。

その時だった。

「う、んん……」

その声に、四人ははつとベッドの方を見た。愛菜が一度寝返りをしていた。孝明がさっと駆け寄り、その後ろに禎志も来た。

「記憶が、消されているかも知れない」

禎志は小さく呟いた。

「まさか、あの機械で？」

「ああ。そしたら、愛菜はパニックになるかも知れないな……」

「」

すると愛菜は顔を顰めながら、ゆっくりと目を開いた。

「あ、愛菜！」

「……孝明、君？」

愛菜はまだ完全に見開いていない目で、確かに孝明を呼んだ。

「よ、良かった。記憶が消えてない」

孝明はほっと胸を撫で下ろした。その後ろで、禎志は混乱していた。

何も無かったと……？まさか、失敗したのか？

「あつ……」

突然、愛菜が頭を抱えるように押さえた。孝明がすぐに反応し、

隣に付いた。

「おい、愛菜？大丈夫か？」

「あつ、怖い……！」

愛菜はそう声を漏らしながら、頭を抱えて横になった。

「おい、愛菜！愛菜！」

「誰……お姉ちゃん、助けて……」

その言葉に、禎志ははっとした。

「ま、まさか！」

禎志は愛菜の横に座り、さっと愛菜の腕を取った。愛菜ははっとして、禎志の顔を見詰めていた。

「大丈夫か、陽奈？」

「あ、さ、禎志さん……」

その時、愛菜の目からぼろりと涙が落ちた。そして、愛菜はぎゅっと禎志の胸にしがみ付いた。

「あ、愛菜？」

「孝明、大丈夫だ」

禎志はそう言いながら、愛菜の背中に右手を回し、左手で頭を優しく撫でた。

「奴は、記憶を奪ったんじゃない。あの時に消去した筈の記憶を何らかの方法で保存し、再びこいつの中に蘇らせたんだ」

「じゃあ、愛菜は今……」

「ああ。混乱しているだろう。陽奈である時の記憶と、愛菜である時の記憶が、混じっているからな」

愛菜は大量に涙を流しながら、まだ禎志に抱き付いていた。

「愛菜が会っていない筈の禎志を知っているという事は、話した事は全て事実なのか？」

「ああ、残念だがな」

禎志は答え、愛菜をそっと抱き締めた。

「禎志さん、私、恐かった……」

「大丈夫だ、陽奈。もう大丈夫だからな」

「私、昔の記憶を戻されて、それで、信じられなくて……」
よしよし、と言いながら、禎志は愛菜を優しく撫で続けた。

「禎志さん。私は、陽奈なの？愛菜なの？分からないよ……」

「昔の記憶が戻ったなら、明奈の事も分かるな？」

「うん、お姉ちゃんの事、分かるよ……」

「なら、陽奈で良い。大丈夫だ、心配するな。俺がいる」

禎志は泣き続ける愛菜に、笑顔で囁いた。

それから、愛菜は禎志の腕の中で泣いていた。延々と泣き、暫くし、愛菜はそつと禎志の胸から顔を離した。

「落ち着いたか？」

「うん。まだ不安だけど、もう大丈夫」

最後の涙を拭い、愛菜は顔を上げた。そんな愛菜の表情を、孝明が遠慮がちに覗いた。

「大丈夫か、愛菜……じゃなかった。えっと、陽奈？」

「孝明君達は愛菜で良いよ。私は大丈夫」

愛菜は目を覚ましてから初めて笑った。その時、孝明は目を丸くした。

愛菜の笑顔に、もう一人の面影を見た。それは、明奈なのか。もしくは、陽奈であった時の笑顔なのか。どちらにしろ、記憶を取り戻した愛菜は、同時に何かを手に入れたようだ。

「よし、陽奈が落ち着いた所で、本題に入ろうか」

四人の前に座り、禎志はそれぞれの表情を見た。

「この島を脱出するに至って、全員の覚悟が必要になる。ちなみに、全員が揃わなければ、決行は出来ない。ここに隠れるのも良いが、いつかは限界が来る」

「俺は行く」

真っ先に答えたのは、孝明だった。

「俺は何が何でも脱出してやる。もちろん、この五人で」

孝明のその言葉に、他の三人も表情が変わった。

禎志は視線を孝明から茜に移した。

「茜は？」

「私は行く。もう帰って早くお風呂入りたいよ」

何とも無邪気な理由に、禎志は思わず笑ってしまった。

「そうか。守人、お前は？」

「僕も行くよ。ちょっと怖いけど、お兄ちゃん達とお姉ちゃん達がいるから、大丈夫」

「そうか。よく決断したな」

幼くも強く固められた意志に、禎志は微笑んだ。

そして、視線を最後の愛菜に向けた。

「陽奈、お前で最後だ。どうする？」

禎志の質問に、愛菜は一度俯いた。そして、ぎゅっと拳を握っていた。

「陽奈………？」

「うん。私は………」

そう小さく呟いた愛菜は、さっと顔を上げた。

「一緒に行く。心の中はごちゃごちゃしてて正直、今自分っていう存在が曖昧だけど、それでも、陽奈の心も、愛菜の心も、全てが私自身だと思うから。それに、孝明君、茜ちゃん、守人君、禎志さんもいる。もう何も怖くない」

愛菜は自分の胸の辺りに握った手を当てながら、しっかりと口調で言った。

「皆で帰ろう。私達の家」

愛菜の言葉に、他の四人も頷いた。

「これで決まったな」

そう告げると、禎志は再び奥のパソコンの前に座った。そして、キーボードで何かを打ち始めた。

「ならば、動くのはもう少ししてからの方が良いな」

「え？」

孝明は禎志の後ろまで近付き、パソコンの画面を見た。そこには、

島の地図のようなものが映っており、恐らくそれに関する難しいデータが孝明には到底理解出来ない文字で記されている。

「今の所、この島は本州との距離が100キロ弱ある。今も北北東に進んでいるから、もう少し様子を見よう」

「え、もしかして、この島って……」

孝明が言い終える前に、禎志は頷いて答えた。

「ああ、この島は大陸なんかじゃない。大雑把に言えば大きな一つの船だ。元々は一つの島だったが、あの事件後にあいつは現実に追いつまれている犯罪者達を集め、その闇の部分以外の記憶を全て消去した。そしてそいつ等を従え、この船を完成させた」

「何で犯罪者を？」

孝明は首を傾げ、禎志の目を見た。

「罪を犯した愚かな人間に、手を差し伸べてくれる人間は極僅かだ。そこを狙ったんだろ。そして、犯罪以外の記憶を消去したのも、彼等に服従を誓わせ、その狂気を利用する為だろ」

「何て事を……」

「そして付けられたこの島の名は、『クリミナルアイランド』。犯罪者の島、という意味だ」

すると、画面に新しいウィンドウが現れた。そこで禎志は孝明に振り向いた。

「携帯持つてるか？あれば強力な武器になるんだが」

「ああ、あるよ」

孝明はポケットに入っていた携帯を出し、禎志に渡した。携帯を手に入ると、禎志は他の三人にも言った。

「お前達、ついに作戦実行するぞ。もう後戻りは出来ないが、良いな？」

禎志の問い掛けに、全員が頷いた。それぞれの顔を見て、禎志は笑みを零した。

「よし。じゃあ、作戦開始だ。俺が一通りの作業を終えるまで、体を休めたりリラックステキしたりして、心の準備をしておけ」

そう言い、禎志はパソコンに向き合い、凄まじいスピードで作業を開始した。

「孝明はちよつと俺の手伝いをしてくれるか？」

「ああ、分かった」

孝明は返事をし、禎志の隣に座った。

「それにしても禎志、携帯なんて何に使うんだ？」

「こいつの通信機能を使うんだ。あの男に一発ぶちかましてやる」
ついに五人の脱出計画が始まった。彼等の命を懸けた戦いは、とうとう幕を開けた。

何故だ。何故見つからない。何故彼等は姿を消したのだ？

種子野は焦っていた。さっきまで掌の上で遊ばせていた五人が、完全に姿を消したのだ。

「どういう事だ。どこに隠れたというのだ……」

いや、しかしこの島にいる事は確かだ。ここから逃げられる筈がない。この島から、逃がす訳にはいかない。

「ボス、どうしましょう？」

「こつなつたら、多少傷付けても良い。手足の腱を切っても連れてこい。陽奈の記憶が戻った事で、混乱している筈だ。スムーズに動ける筈がない。全力で探し出せ」

「はっ！」

部下はいつものものようにはつきりとした返事をした。種子野は椅子に座り直し、顔を顰めた。

「禎志め、とうとう牙を剥いたか」

まあ、あいつの性格を考えるなら、いつかは来ると予想していた事だ。それなら、お前のその心を潰してやろう。その優しさが、命取りになる事を後悔するが良い。

「それと、アレを出しておけ」

「あ、Aですか？」

「そつだ。なるべく早く用意しておけ。もうじき奴等が動いてくるだろう」

そつ。もしこの島にいるのならば、私はまだお前達の一步先にいる。

「父親とは、超えるものなのか、なぎ倒すものなのか……」

種子野は、ふっと笑みを浮かべた。

孝明はベッドの端に座り、パソコンの前で最後の作業を続ける禎志を見ていた。ベッドには茜と守人が寝ており、愛菜は孝明の隣で黙って座っていた。

「凄え……」

禎志を見詰めていた孝明は、思わずそう漏らしていた。

禎志は人間とは思えないスピードで目の前の機械を操り、次々と作戦の為の準備を進めていく。孝明達四人の為に、寝る間も惜しんで奮闘し、最後の決戦に挑もうとしている。

孝明の目には、頼もしい兄の姿が映り始めた。

「孝明君」

「ん？」

隣から呼び掛けた愛菜に、やや遅れて振り向いた。

「愛菜、どうしたの？」

「私、このまま逃げて良いのかな……」

愛菜は俯いて、暗い表情でそう言った。

「私が大人しく捕まれば、皆痛い目に遭わないで済んだのかな……」

「な、何言ってるんだよ愛菜。一体どうしたんだ？」

孝明は落ち込む愛菜の表情を覗きながら、慌てて言った。

「だって、私の事を助けずに最初から逃げていたら、成功したかも知れないのに、私の所為で……」

「そんな事はない」

その時、涙ぐむ愛菜の頭に、大きな手が乗せられた。愛菜が顔を上げると、そこには兄としての目で見下ろしてくる禎志がいた。

「俺にとつては、お前は絶対に守らなくちゃいけない存在なんだ。

お前が何と言おうと、絶対に俺が守る。お前だけじゃない。ここに
いる四人全員、俺が絶対に脱出させてやる」

禎志は手を愛菜の頭にポンと乗せた。

「孝明、茜と守人を起こせ。ついに決行するぞ」

「ああ、分かった」

言われるまま、孝明は二人を起こした。茜は疲れが取れたようで、
守人も元気になっていた。

禎志は四人を円形に座らせ、中央に地図を置いた。

「これがこの島の地図だ。良いか、俺達は今ここにいる」

禎志はほぼ円形である島の、中央よりやや北西側を指差した。

「こんな島に地図なんてあったんだ……」

「ああ。だが、実際にこの島は移動しているから、俺達は今ちょうど北側になっている。つまり、一番日本本州に戻りやすい方位だ。

そして今から俺達は、ここに向かう」

禎志は地図に当てていた指を島の外に向かって走らせ、島の沿岸
部で指を止めた。

「ここに、俺が内密に用意していた脱出用の潜水機がある。これで
この島を脱出しよう」

「こ、この人数乗れるのか？」

「一応造りは三人乗りだが、五人のうち二人は体の細い女子。一人
は小さな小学生。充分乗れるだろう」

そう言うと、禎志は立ち上がり、四人を見下ろした。

「さあ、もうすぐコンピュータも最後の仕事を終える。準備してお
け」

禎志の言葉に、四人はそれぞれ準備を始めた。

その時、孝明の肩が後ろから叩かれた。

「ん？」

「孝明、これを持っておけ」

禎志はそう言い、持っていたものを渡してきた。三角形の黒い革の包みで、中に何かが入っている。孝明はそれを取り出してみた。

中に入っていたのは……

「こ、これって……」

「ああ。俺が使っているのと同じ、レーザー銃だ」

禎志は自分が持っているのを見せて言った。

「ま、待てよ。俺銃撃なんてやった事無いし、流石に敵でも打てねえよ！」

「俺だつて殺せない。殺した事も無い」

その言葉に、孝明ははっとした。ビルを脱出する時の、あの出入り口で気付いた違和感の正体が分かった。

禎志はここまで多く繰り広げられてきた銃撃戦の中で、隊員全員を倒しながらも、隊員を誰一人殺していなかったのだ。それはあの命懸けの場面でも動じない冷静さと、確実な射撃力を兼ね備えている事、そして、他の犯罪者とは違い人に対する優しさを持っている事を意味していた。

「別に撃たなくて良いんだ」

「撃たなくて良いなら、何で渡すんだよ！」

「別に何も無い時は銃を抜かなくて良い。それを抜くのは、万が一の時だ」

禎志は自分の銃を仕舞うと、孝明に顔を近付けて囁いた。

「俺がいない時、あいつ等を守るのはお前だけだぞ」

そう言われた時、孝明は心のずつと奥で、何かを感じた。それは時折発揮していた、あの冷静さを感じた時と同じ感覚だった。

禎志と、そして種子野とも繋がっているこの血が、孝明の中で疼き出した。

孝明は、義兄である禎志から、その冷静さを受け継いでいたのだ。
「頼んだぞ、孝明」

禎志は優しい口調で言い、孝明の頭を撫でた。孝明は、そんな禎志の顔を見上げた。

禎志、何で

孝明は冷静に感じ取っていた。まるで禎志の言い方が、自分が死ぬと告げているような口振りだった事を。

その瞬間、例のパソコンからピーという音が鳴った。すると、禎志がパンと手を鳴らした。

「よし、行くぞお前等。絶対に脱出するぞ！」

禎志を先頭に、五人は扉を飛び出した。

第八章 皆で帰ろう

息を殺し、身を潜める。足音が去っていくと、孝明達はすぐに移動を再開した。

「よし、それで良いぞ皆。時間はある。確実に行くぞ」

「ああ」

「うん、分かった」

少しずつ道なき道を進んでいく。その中、孝明は少し緊張していた。右手をすつと、腰に提げた銃ケースに伸ばす。

俺が撃つ事なんて、出来るのか？いくら犯罪者とはいえ、殺すなんて惨い事は出来ない。いや、そんな勇気本来なら無い。それを、乗り越えられるのか？

「孝明君？」

呼び掛けられ、はっと我に返った。視線を左に動かすと、愛菜が不思議そうに顔を覗き込んでいた。

「大丈夫？」

「あ、ああ。大丈夫だよ」

「そう。なら良いんだけど」

愛菜に笑顔を返し、孝明は再び前を見た。愛菜は不自然な孝明の様子には気付いていたが、その本心までは知らなかった。

十分程度した時、景色の中に海が映った。

「あ、海だ！」

「何か久し振りに見たなあ」

「海が見えたという事は、あと少しだ。皆、頑張れ」

禎志が四人を励まし、更に先へと足を進めた。

「なあ、愛菜」

孝明がそう呼ぶと、すぐに愛菜は振り向いた。

「孝明君、何？」

「これ、お前に渡しておくよ」

「あつ……………」

それは、あの二つのペンダントだった。

「持ってきてくれたんだ……………」

「まあな。大切な物だろ。お前と明奈さんの物だし、返しておくよ」

「うん、有難う……………」

孝明はそのペンダントを、愛菜の白い手の上に優しく乗せた。

巨大なコンピュータに、様々な場所の映像が映っている。島全体の様子を窺えるこの監視室の中央で、種子野はタバコに火を点けていた。

種子野がタバコの火を消した瞬間、突然右端にいた隊員が叫んだ。

「あ、発見しました！彼等の居場所が判明しました！」

「何？」

種子野はその部下に振り向いた。

「一体どこだ？」

「B 21地区です。五人全員がいます。そこから真っ直ぐ島の外側に向かっていている模様です！」

「島の外側か……………しかし、そこに何かがあると言っただ。禎志」

何か引っ掛かるな。あいつの事なら、きっと何かがある……………

種子野は前にあるマイクで、島中の隊員に告げた。

「奴等の消息を掴んだ。B 21地区だ。五人は島の外側に向かっていている。五人を足止めしろ。そしてその方向に向かわせないようにし、その方向を調査しろ！」

そう指示を伝えると、後ろにあった大きな椅子に座った。

「ボス、植野禎志はどうしますか？」

「奴ならきつと戻ってくる。Aが用意してあるのなら、心配はいらん。好きにしる」

絶対、この島からは逃がさん！

「砂浜が見えた！」

茜がそう叫ぶと、孝明も顔を上げた。

木々が遮かくっているその視界の向こうに、波が寄せる砂浜が見えた。その砂浜を見て、孝明は疑問が浮かんだ。

「あれ、禎志。俺達が乗っていた船って……」

「お前達が乗っていた船は、あの地図で言う東側だ。ここは地図の北北西だから、もう少し東に行けば見える位置にある筈だ」

「じゃあ、あの沢山の遺体とか……」

「無い、とは言えない。こっちの方に逃げた人もいるかも知れないからな。でも、最低あの船の付近よりはだいぶ少ないだろう」

「そっか……」

孝明は答えを聞き、少し俯いた。禎志は他の三人にも促すように、孝明を励ました。

「とにかく、今は脱出を考えよう。俺達の光はもうすぐだ」

「……ああ！」

孝明は顔を上げ、また強く一步を踏み出した。

その時、かなり近くで突然爆発音がした。

「うわっ！」

「な、何だ？」

「……居場所がばれたか」

禎志は四人を伏せさせ、周りの状況を確認した。

すると、立て続けに爆発が周りで起こった。

「おい、返事をしろ。そこにいるのは分かっている！」

禎志は腰のバッグから手榴弾を取り出し、スイッチを入れた。

「そんな簡単に言うかよな」

禎志はそう孝明に微笑み掛けると、手榴弾を後方へ思い切り投げた。

「皆、耳塞げ！」

四人が耳を塞いだ瞬間、更に凄い爆発音と、いくつかの悲鳴が聞こえた。

「よし、今のうちに行くぞ」

禎志の指示で再び五人は進み始める。しかし、既に囲まれていたのか、次々に爆弾が投げつけられる。

「こりゃあまさに戦場だな」

「そ、そんな呑気に言ってる場合かよ」

「そうでもしねえと平常心持たねえよ」

禎志は再び手榴弾を投げつける。四人は学習し、さっと耳を塞いだ。

何度も繰り返して攻撃され、反撃する。

「あつ、禎志！」

すると、進んでいる方向の先に、一人の隊員が下りてきた。更にその手には、爆弾があった。

「まずい！」

その爆弾が投げつけられた。あの威力では、吹っ飛ばされてしまふ。

流石の禎志でも対応出来なかった。

次の瞬間、五人の場所で爆発が起こった。

「うわっ！」

五人はその場から転がり、砂の上に落ちた。そこはもう、砂浜の手前だった。

「あつ、さ、禎志！」

孝明は禎志の様子を見て、恐怖を感じた。

禎志の左腕は、肘の辺りから先が吹っ飛ばされていた。爆発する瞬間、禎志は四人への被害を軽くする為、咄嗟に左手で防いでいたのだ。残った腕の先からは、大量に赤い血が流れていた。

「禎志、う、腕が……」

「孝明、黙って伏せてろ！」

禎志はそう怒鳴り、隊員達に向けてレーザーを撃ち込んだ。次々と負傷し、数が減っていく。歯を食い縛る禎志の口から、一筋の血が流れ出た。

「行くぞ。皆走れ！」

あの禎志が冷静さを失っているのを皆感じ、急いでその場を移動する。

「禎志、その腕じゃ……………」

「黙ってる孝明！今は走れ！」

禎志はもうかなり負傷していた。既に何発か撃たれているし、決定的なのは左肘から先を失った。半端じゃない出血量に、体力は異常な速さで消耗されていく。

「あそこだ！」

禎志は数十メートル先の岩場を指差した。

「あそこに脱出用の潜水機がある！あそこまで急げ！」

「きゃあ！」

その時、愛菜が突然転んだ。よく見ると、右足を撃たれていた。

「陽奈！」

さつと禎志が戻り、右腕で愛菜を抱き抱えた。

「陽奈、耐えてくれ。もうすぐだ！」

「う、うん……………」

全員全力疾走で岩場を目指す。足の遅い守人も、孝明と茜に引っ張られて付いていった。

しかしその時、禎志の横っ腹を銃弾が貫いた。

「ぐっ……………」

「禎志！」

「こんな所で死ぬか！」

禎志は僅かに怯み、一瞬で再び走り出した。そして、何とか岩場に到着した。

禎志の声で、岩場の一部が扉のように開いた。そして、五人は中へと入っていった。

少し進むと地面に四角い扉があった。それを潜って少し長い螺旋階段を下り、一番地下に着いた。そこには海水が溜まった場所があり、その水の上に乗る場を出した、一台の大きな潜水機があった。

「よし、皆乗れ！」

やや狭いスペースに、孝明達が次々と乗る。

しかし何故か、禎志は最後まで乗らなかった。

「おい、禎志。早く乗れよ」

四人が乗り終え孝明が当然のように急かすと、禎志は急に笑顔になり、首を横に振った。

「俺は良い。有難うな、皆」

「お、おい、どうしたんだよ禎志。早く乗れよ」

「いや、俺は残る。どんなに逃げてても、誰かがこの島を潰さない限り、この島とあの男は存在し続ける。俺は残って、最後の後片付けだ」

「何言ってるんだよ！禎志も一緒に脱出するんだ。皆で日本に帰ろう！」

「ごめんな、孝明。俺はお前等と一緒にには帰れない。これが俺の使命なんだ」

禎志は軽く笑いながら、話を続けた。

「俺はお前達兄弟と、陽奈の元気な姿が見られて良かった。これで死んだって悔いは無いよ」

「駄目だ！左腕も無くて、そんな怪我してるんじゃない危険だ。もし禎志が残るなら、俺も残る！」

「私も残る！」

「駄目だ！」

孝明と愛菜の言葉を振り切り、禎志は叫んだ。

「孝明、お前に言っただろ。俺がいなかったら、皆を守るのはお前だつて。お前までいなくなったら、誰も守ってくれる人がいない。

それに陽奈も、絶対にこんな所で命を捨てちゃいけない。お前は明奈が遺した、俺と明奈にとっての形見だ。だから、皆と一緒に生き

延びてくれ」

「禎志さん……」

愛菜が涙の込み上げてきた目で見詰めると、禎志は優しく微笑んだ。

「その潜水機を操作して、脱出するんだ。ここから潜って海に出られる。操作は簡単だから大丈夫。それに、日本のお偉いさんに連絡はしておいた。お前達とこの島のデータを送っておいた。今に自衛隊が助けに来てくれる。だから、なるべく早くこの島を離れる」
なるべく早くこの島を離れる

孝明は、その言葉の意味を瞬時に判断した。

「なるべく離れるって、まさか禎志、自爆する気か！」

「自爆じゃない。格納庫にある大量の核に火を点けて、島を爆破するだけだ」

「それこそ自爆じゃないか！嫌だよそんなの！やっぱり一緒に帰ろう！禎志も一緒に生きるんだ！」

孝明は必死に、全力で怒鳴った。

こんな所で、死んで欲しくない。この島に迷い込んでからずっと守ってきてくれて、最後まで救ってくれた命の恩人に。

やっとなえた、唯一の兄に。

「なあ、孝明」

すると禎志はしゃがみ込み、孝明の頭に手を乗せた。そして、優しく微笑んだ。

「大丈夫だよ、俺は。こんな所で死にはしないよ。ちゃんと戻ってくれば良いんだろ？だから、先に帰っていてくれ。すぐ帰るから。約束だ」

禎志の優しい笑顔が、孝明の心を揺らした。

そして、孝明の目から涙が零れ始めた。

「あ、兄貴……」

孝明がそう呼ぶと、禎志はふっと笑った。

「はあ、やっとな兄貴って呼んでくれたな。全く待ちくたびれたなあ。」

なかなか兄貴を困らす次男坊だ。俺が戻るまで、皆を任せたぞ」

そう言い、再び禎志は笑った。

「陽奈」

今度は愛菜の前に移動し、また同じように手を頭にポンと乗せた。「お前は、あの頃と比べると本当に可愛くなったな。明奈にも似てきて、女の子らしくなった。本当にお前を守れて良かった。あつちに行ったら、皆を頼んだぞ。孝明は守る力はあっても、馬鹿ですぐ血が頭に上るからな」

「へへ、うん」

「楽しく、皆と生きるんだぞ」

「うん……」

愛菜は拭っても拭いきれない涙を拭い続け、小さく頷いた。

「守人、お前は俺の本当の弟だ」

孝明の後ろにいる守人に、禎志は兄として話し掛ける。

「お前は唯一完全に血が繋がってる奴だ。ちゃんとこの兄ちゃん姉ちゃん達の言う事聞くんのだぞ。それと、もっと飯食って大きくなれよ。そうすればきっと何かを守れるようになるぞ」

「うん、有難う兄ちゃん」

守人は涙でくしゃくしゃの顔で頷いた。

「茜」

禎志は最後に茜を見た。

「お前も可愛い女の子になったな。双子なのに、孝明と違ってなかなか真面目だしな。本当によく話してよく笑うし。向こうに着いたら、ゆっくりお風呂入れよ。体を休めて、また皆と頑張れ」

「う、うん……」

茜は俯いて涙を流しながら、それでもしっかり返事をした。

その時、爆発音が小さく遠くから聞こえてきた。

「表の扉が突破されたな。時間が無い、行くんだ」

「ま、待って！」

愛菜が突然叫んだ。懐から何かを取り出し、禎志に向かってそれ

を差し出した。

「帰ってくるって、約束してくれるんだよね。だったら絶対に、これを持って生きて帰ってきて。お願い！」

禎志はそれを受け取り、笑顔で応えた。

「さあ、時間が無い。行け！」

「うん……またね、お義兄ちゃん」

愛菜のその声を最後に、潜水機の透明な扉が閉まった。そして、ゆっくりと水の中に消えていった。禎志は見えなくなるまで、四人を見守った。

その時、ついに螺旋階段上の扉までもが撃破された。破壊された扉が、禎志の横に落ち、派手な音を立てた。

「良かった、皆……」

とうとう逃がしてやれた。あいつ等を死なせなくて、本当に良かった。それに、この姿は絶対に見せたくなかった。

禎志は受け取った物をポケットに仕舞い、銃を手にとった。

「さあ、植野禎志。観念しろ！」

禎志はすつと一度深呼吸をし、振り返って彼等を見上げた。

その時、そこにいた隊員達は背筋が凍る程ぞくりとする凄まじい殺気を感じた。

禎志の目が、完全に変わっていた。さっきまでの優しい兄の目ではなく、どす黒い殺気を帯びた反逆者の目に。

「今の俺に、話し掛けるな」

そう言い、禎志は彼等よりも早く銃を連射した。その一発一発が外れる事無く、彼等の心臓を貫いた。撃たれた人間はほとほと禎志がいる地面まで落ち、大量の血を流して息絶えた。

「絶対に、俺はあいつ等の元へ帰る。その為に、種子野憲正。俺はあんたを殺す！」

禎志はポケットに入れた物を手に取り、じっと見詰めた。

禎志は太陽のペンダントを握り締めると、一気に階段を駆け上がった。

第九章 兄弟の絆

船内はとても重たい空気だった。孝明がこの潜水機を操作している音以外、何も音はしない。

孝明は黙って操作に集中し、愛菜はガラスの向こうに映る海の景色を意味も無く見詰めていた。茜も一言も話さず、守人も大人しく座っていた。

ただ一つ言える事は、皆禎志の事を心配していた。

「これで、良いのか……?」

孝明は一人で呟いた。しかし、静かな船内では三人の耳にも届いていた。しかし誰も答えない。答えを出せない。

沢山の魚が泳ぐ海の中を、とにかく北の方へ進んでいく。このまま行けば、何とか日本には着けるだろう。

「なあ、皆」

すると、孝明は三人に振り返って言った。

「やっぱり、島へ戻ろう」

孝明の言葉に、誰も反応を示さない。

「やっぱり兄貴だけを置いてはいけない。だから戻ろう!」

茜が表情を暗くし、守人が顔を伏せた。愛菜は俯いたまま、孝明の話を聞いていた。

「今から戻って、皆で助けに」

「駄目……」

その声に、孝明は愛菜を見た。愛菜は顔を上げ、孝明を見た。

「このまま、帰ろう。それしか無いよ」

「何言ってるんだよ! 兄貴はあんな怪我してるんだぜ? 一人じゃ無理だ! だから、助けに行つて」

「助けに行つてどうなるの!」

愛菜の突然の叫び声に、孝明は一瞬怯んでしまった。

「助けに行つた所で、私達に何が出来るの? お義兄ちゃんはもう行

動しちゃってるのに、連絡が取れないでどこにいるか分かるの？それに今までだって、ずっと助けられてばかりじゃない。一緒にいたって、ただ足手纏いになるだけ！もう少し冷静に考えてよ！」

「冷静に考えてるから、兄貴が危ないんだろ！第一、あのままじゃ兄貴は自殺する事になるだろ！それをただ見殺しにするのかよ！」

「孝明君は何も分かってない！」

愛菜はとうとう涙目になり、更に強く言い返した。

「お義兄ちゃんが、どういう気持ちで私達を逃がしたと思ってるの！それなのに、わざわざ戻って犬死になんてしたら、どれだけお義兄ちゃんが悲しむと思ってるの！それこそ自殺の引き金じゃない！」

「俺達だって兄貴を失いたくねえんだよ！」

その瞬間、愛菜の手が伸びた。

孝明の頬が、機内に響く音を鳴らした。

孝明は顔を横に向けたまま、驚いて固まっていた。そして目の前で愛菜は、崩れるように泣き出した。

「私だって、失いたくないよ。でも、今はこれしか出来ないよ。だからお義兄ちゃんの為にも、生き延びる事しか出来ないの！」

今までずっと我慢続けてきたものが、一気に溢れ出した愛菜は、子供のように泣いた。孝明は打たれた頬を押さえ、俯いた。

「分かったよ………」

ただそれだけ言い、孝明は前に向き直った。

とても静かな機内に、愛菜の泣き声が延々と響いていた。

向かってきた相手を撃ち、襲ってきた相手を殺し、禎志は頂の建物を目指す。

もう既に限界の足で、険しい山道を登る。時に奇襲に遭い、時に意識が薄れながらも、次々と迫る隊員達を殺し、その屍しかばねを越えていく。

禎志は表の人格を全て剥ぎ取り、ただ血と本能に任せて体を動か

していた。それは心の奥でずっと留まっていた、闇の部分だった。

撃たれても、ただそのまま突き進み、撃ち返す。

「うああああ！」

目の前に立ちはだかる敵に、次々と銃口を向けた。そして相手が倒れるとその遺体に目をくれる事も無く、ただひたすらに実の父親を目指す。

こんな所で、絶対に終われねえ。あいつ等と約束したんだ。絶対に、生きて帰るって。

その時、腹の辺りを銃弾が貫いた。

「うっ………！」

その場に膝を突き、顔を上げた。そして、その方向へ銃を向けた。「邪魔するなあ！」

ずっと先にいる男を撃ち抜いた。男はばたきと倒れ、何も音がしなくなった。

「まったく、何人いるんだか。キリが無えな」

ふっと笑いながら、すっと立ち上がり、再び進み始めた。

何が何でも、絶対に………

ずっと歩き続けると、ようやくあの建物が見えてきた。もう少しで、目的が達成出来る。

しかしそれは同時に、更に警備が固く敵の数が増えるという事だった。

「いたぞ、奴だ！」

「全員で捕えろ！」

まるで軍隊のような数の敵が迫ってくる。禎志は深呼吸を一度すると、その群れに突っ込んでいった。

「うおおお、どけえ！」

立ちはだかる邪魔者を次々と撃ち殺していく。銃声が響く毎に辺りは赤く生々しい血に染まり、転がる死体の数は増えていく。

それはまさに戦争だった。巨大な核兵器とも言えるこの島に対し、立ち向かうのはたった一人の青年。しかし、どれだけの数を送り込

んでもその青年が圧倒し、ずんずんと島の心臓部に向かって進んでいく。

その青年、禎志は生きる為に、そして愛する兄弟の元へ帰る為に、実の父親の命を狙っている。そしてその実の父親でもある種子野も、同じように禎志を狙っている。

「はあ、はあ………」

禎志の体力は異常な速さで失われていく。もう既に足はふらつき、得意の射撃も少しずつではあるが精度を失っていた。

ふっと力が抜け油断した瞬間、右肩辺りを銃弾が貫通した。激しい痛みが体中に走り、咄嗟に膝を突いてしまった。

「ぐっ………」

「今だ、取り押さえろ！」

周りから凄い勢いで隊員達が迫ってくる。禎志は歯を食い縛り、懐から手榴弾を三つ取り出した。スイッチを入れ、さっと右手に移す。

「喰らえ！」

その手榴弾を周りに投げつけた。辺り一面で爆発が起こり、激しい爆風が禎志を包み込む。

音が静まり状況を確認すると、兵は全員死んでいた。禎志はゆっくりと立ち上がり、とうとう建物の目の前まで来た。

「待ってるよ………」

血まみれの右手を握り締め、禎志は建物の中へ足を踏み入れた。

種子野は再び部屋に戻り、窓から島を眺めた。

「いよいよ、ここまで来たか。」

「禎志………まさかここまでとはな」

今まで自分が集めてきた犯罪者達は、生半可な奴等ではない。とことん悪意が強く、そして強力過ぎる人員を集めてきた。

それを禎志は、たった一人の力で滅ぼしていく。まさに自分の血

を引いている。何とも誇らしく、何とも禍々しい。

「これが、最後の勝負だな」

種子野は一度目を閉じ、再び開けると部屋を出た。

突然、船が大きく揺れた。愛菜は一瞬悲鳴を上げ、守人が茜にしがみ付いた。

「な、何だ!」

孝明は船の周りを確認した。この船は超強化ガラスが一面にあり、360度見渡せる。さっきの揺れはどうやら、近距離で起きた爆発らしい。

「ど、どうしたの。何があったの?」

「分からない。でも、分かる事は……」

孝明は後方に振り返り、ぐっと手を握った。

「追っ手が、来る……!」

後ろの窓から覗くと、不気味な黒い潜水艦が二機迫っていた。

「逃げよう!」

孝明は船のスピードを上げた。その時、後ろの潜水艦から何かが発射された。それが船に当たり、大爆発を起こした。

「うわあ!」

「きゃあ!」

大きく船が揺れ、孝明達は振り回される。

「ミサイルみたいの撃ってきたぞ!というか、これでビクともしないなんて、兄貴の潜水機凄え!」

「そんな事言つてないで、早くスピードを上げてよ!」

「これ以上出したら、俺のコントロールが付かねえぞ!」

更に、次々とミサイルが放たれる。機体に当たっては爆発し、孝明達を襲う。

そんな中、孝明はまた冷静さを取り戻しつつあった。心臓は高く鼓動を打つのに、頭は少しずつ冷えていく。

兄貴は、必ず戻ってくると言った。そう約束してくれた。そして、戻ってくるまで、俺が皆を守れと言った。

このままだと、いくら禎志の潜水機が頑丈だろうと、いつかは限界が来る。仮に船が持ち堪えたとして、日本に戻ったらこいつ等をどうする？

人を殺めるなんて事は、恐くて絶対に出来ない。でも、今奴等を倒さなきゃ、皆を守れない。逃げ切る事も、ここで奴等を撃ち落とす事も、俺がやらなきゃいけないんだ。

「……………愛菜」

「えっ？」

孝明の隣の椅子にしがみ付いていた愛菜は、突然名前を呼ばれふと顔を上げた。

孝明は顔を上げると素早く立ち上がり、愛菜を見下ろした。

「操縦を頼む。この船を、海面まで上げてくれ。そして船の頭を海上に出してくれ」

「ど、どうするつもり？」

愛菜の言葉を聞きながら、孝明は腰に手をやった。そして、銃ケースに手を伸ばし、レーザー銃を取り出した。

「俺が、あの二機を撃ち落とす」

「そんな、無茶な！」

「俺がやるしかないんだ」

孝明はそう言い、上の扉に繋がる梯子はしを登った。

「頼んだ、愛菜」

「……………うん」

愛菜は俯きながら短く答え、操縦席に座った。

その時再び、敵のミサイルが潜水機を直撃した。愛菜がまだハンドルを持っていなかった為、船が大きく軌道を変えた。

「うわっ、愛菜！」

「お、落ちないで！」

愛菜は思い切り船を上げ戻した。すると船は何とか、再び上昇を

始めた。

船はついに海面に出た。すると孝明は上部の扉を開け、外に出た。

「孝明君！」

「大丈夫。愛菜は操縦に集中してくれ」

「……………頼んだよ」

「ああ、任せろ」

そう言うと、孝明は完全に船の上に出て、扉を閉めた。

ずっと後方にはあの島が浮かんでいる。辺りは一面の海。動ける範囲は半径一メートルも無い。ここで落ちれば、二度と助かる事は無い。

水面の下に、撃ち落とさなければならぬ、二機の潜水艦。孝明は銃を右手に持ち、銃口を追ってくる黒い影に向けた。

狙いは、潜水艦の上にある丸い扉。あそこを壊せば、一気に潜水艦の中へ大量の水が入り、船員は溺れる。

「俺が……………守る！」

孝明は引き金を引き、ついにレーザーを放った。その時、凄い反動を受けてバランスを崩しそうになった。

「禎志は、こんなのをいつも使っていたのか……………」

相手を確認した。二機の様子は変わっていない。どうやら外したらしい。

孝明は船にしっかりと掴まりながら、もう一度銃を放った。潜水艦には当たっているようだが、扉にはなかなか当たらない。

孝明は銃を連射した。何度もレーザーを撃ち、標的を狙う。

しかし、一向に当たらない。更に相手は二機もいるのだ。

その時、潜水艦がミサイルを再び放った。

「やばい！」

その瞬間、潜水艦が激しく揺れた。孝明はバランスを崩し、滑ってしまった。

「うわぁ！」

手を伸ばし、間一髪掴まる事が出来た。何とか再び上り、体勢を

整えると敵に振り向いた。そして、もう一度狙いを定める。当たってくれ、たった二発で良いんだ。次こそ当たれ！

意地を乗せ、銃の引き金を引いた。真っ直ぐな直線でレーザーが水中へ伸びる。すると、その先で爆発が起こった。

「あ………」

孝明は目を凝らして見詰めた。潜水艦の上部から激しく大きな気泡が噴き出し、小爆発が起こっていた。見事に標的を命中させ、一機を撃ち落としたのだ。

「よし、もう一機。今度は一発で撃ち落としてやる」

孝明は銃を握り直し、体勢を再び整えた。

その時、孝明の後方、船の前方から何かの音が聞こえた。

「あれは………」

ずっと先に、濃い緑色のヘリコプターが見える。数台のヘリコプターが飛び、水上には二、三機の大きな軍艦が動いていた。

「来た、自衛隊だ！」

孝明が安心した、まさにその時だった

「あつ………」

孝明が叫ぶ間も無かった。船の真下で、轟音が鳴り響いた。海水が空に舞い上がる程の爆発が起き、高波が孝明の体を呑みこんでいった。

海面から漏れる光で輝く海の中に、孝明は沈んでいく。乗っていた船がぐらぐらと揺れながら少しずつ離れ、逆に目の前に黒い潜水艦が迫ってくる。

俺は、死ぬのか………？

孝明の意識は薄れながらも、まだあった。真っ逆さまに底へ落ちていく中、ひっくり返った視界には、暗い海底の方から迫る潜水艦が見えている。

この時、孝明には力が残っていなかった。海面へ泳ぎ上がるうとする事も出来ない。しかしこのまま水中に浮いていれば、ミサイルの良い標的だ。撃たれないとしても、その先の運命は同じ。

待っているのは、死だけ

……ごめんな、皆。最後まで、兄貴が帰るまで守るって約束、果たせなかった。でも、これでも精一杯やったんだ。だから、恨まないでくれよ。許してくれ。

せめて最後に、追っ手は撃ち砕く。守る為に、もがいてみせるから。

孝明はほとんど消えかけている意識の中、右手に握っていた銃を、ゆっくりと前に向けた。その銃口の先には、あと数十メートルまで近付いている潜水艦。

その潜水艦の中央辺りから、二発のミサイルが発射された。そのミサイルは、少しずつ孝明に迫る。一撃で決めなければ、終わる。

最後の力を振り絞り、孝明は銃の引き金を全力で引いた。激しい音を立てて、銃口から赤いレーザーが放たれる。光速の赤い真っ直ぐな矢が、潜水艦の頭部を貫いた。ほぼ同時に、孝明の前にミサイルが現れた。

愛菜、茜、守人、禎志。皆、有難う……

海中で、二つの大爆発が巻き起こった。立ち込める煙の中から、赤と銀色のレーザー銃がゆっくりと落ちていった。

第十章 生き延びて……

血が喉から逆流し、くぐもった声を出しながら吐血した。膝を突き、目の前に転がる大量の死体を見詰めながら、禎志は肩で息をしていた。

「はあ、はあ、くそ……」

禎志は意識が朦朧とし始め、力が上手く入らなくなっていた。目の前に転がっている二〇人程の兵も、普段なら返り血一つ浴びずに倒せた。なのに、三発も銃弾を胸に受け、出血は更に激しくなっていた。

よろよると立ち上がると、また階段を下り始めた。普通ならもう格納庫のある地下七階まで到達している筈なのに、まだ三階までしか行けていない。

階段の一段一段が険しく苦しい。一段下りる度に膝から崩れそうで、もう思考も上手く働かない。

「孝明、茜、守人、陽奈……」

弟妹達の名前を呼ぶ。この四人の為に、今こうして戦っている。

絶対に帰る。四人の元へ、絶対に。

「……あ？」

ふと気が付いた。今は地下五階まで何とか下りてきたが、兵が一人も来ない。どうやら、この建物の中には、もう誰もいないらしい。そうならば、後は突き進むだけだ。

「待つてるよ、皆……」

一段一段、感覚を確かめるように下りていく。

そしてとうとう、地下七階まで下りてきた。階段を離れ、ライトに照らされた白い廊下を歩いて行く。

右手を壁に突きながら、最初の分かれ道を真っ直ぐ進み、次の角に沿って右へ曲がる。一步ずつ、残された力を振り絞って前へ進む。「うう、くそ……」

一瞬視界がぐらりと揺れ、壁に凭れ掛かった。息を整えながら前を
目指そうと踏み出した左膝が折れ、その場に崩れ落ちた。

「……………もう、駄目だ……………」

思わず、そんな言葉が漏れた。

いや、こんな所で寝てちゃいけない。四人の元へ帰る為に、あと
少しの場所まで行かなきゃいけない。

なのに、体が言う事を聞かない。そりゃあ、左腕もぎ取られて、
銃弾をもろに数発受けて、こんな大量の出血を出していたら、普通
は死ぬよな……………」

そういえば、こんな感じだった。あの時も

あの時もこんな風に、仰向けに倒れていた。あの男の部屋の中央
で、左胸の弾痕から赤い鮮血を大量に流し、俺は動けずにいた。

「うっ、明奈……………」

「禎志君、立って！立って逃げて！」

俺が倒れる目の前で、明奈が二人の兵に捕まっていた。明奈は泣
き叫びながら必死に振り解こうとしているが、全く逃げられそうに
なかった。

そして俺達二人の間に立ち、あの男は汚い微笑みを見せた。

「禎志、こんな事をしたお前に、一つチャンスをやろう。お前を殺
し、この子をこの島の中で生かせるか。それともお前をこの島の中
で生かすか。その換わり、この子の命は無いぞ」

あの男がそう言い終えた時、俺はまた血を吐いた。あの男はそれ
を楽しむかのように見下ろしてきた。

「さあ、チャンスは一度だ。お前も早く治療しなければ時間が無さ
そうだからな」

俺は既に限界の呼吸を整えた。そして、はつきりと決断をした。

「俺を、殺せ。好きなだけ弄んで、葬れ……………その換わり、
明奈を……………完全に、島からも解放しろ……………でなけ

れば、あんたを、殺す……」

「そうか。分かったぞ、禎志」

するとあの男はふっと笑みを浮かべ、懐から銃を取り出した。

「お前の望んだ通りにしてやろう」

すると、あの男は銃を構えた。

しかし何とその銃口を、明奈に向けた。

「えっ」

その瞬間、明奈の表情は一気に恐怖のどん底へと陥った。対照的に、あの男は満面の笑顔に変わった。

「や、やめろ！」

「ふふ、禎志、よく見ているんだぞ」

「い、嫌……助けて、禎志君！」

銃声が部屋中に響いた。銃弾が明奈の心臓を完全に貫き、その命を奪った。

「あ、ああ……」

「お前達、禎志を治療室へ運んでおけ」

俺は何一つ出来なかった。胸から血を流して息を引き取った明奈を見詰めながら、ただ運ばれる事しか出来なかった。

「明奈、あき……な」

はっと我に返った。意識を失い、あの時の夢を見ていた。

そうだ。あの時の悲劇を、もう二度と起こしたくない。だから、ここで死んじやいけないんだ。

「明奈……もう少少で、お前の所へ行くから。だから、少少で良いから力を貸してくれ……」

腕に力を入れ、上体を起こした。そして膝を突き、ゆっくりと立ち上がった。

目を閉じて、呼吸を整える。

残り僅かのこの命で、四人の未来と、今まで見守ってくれていた

明奈を守る！

「お前の無念を晴らして、必ず……お前の元へ行くから……」

目を開け、強く一步を踏み出した。歩き出し、そして、走り出した。

扉の続く廊下を駆け抜け、一番奥までやってきた。そこにある扉には、格納庫とプレートが貼られていた。

禎志はノブに手を掛け、勢い良く扉を開いた。

目を開けると、雲ひとつ無い鮮やかな青空が見えた。当たり前景色なのに、何故か久しく感じられた。

俺、生きてるのか……？

「た、孝明君……？」

そんな声が聞こえた。顔を横に向けると、その瞳を涙で一杯にした茜がいた。その反対側には、愛菜と守人の姿も見えた。

「皆……」

寝ていたらしく、上体を起こされた。体を起こしてくれたのは、どうやら自衛隊の人だった。

辺りを見渡すと、大きな船の甲板だった。

「あれ、ここ……？」

「我々の戦艦だ。安心してくれ」

「孝明君！」

その時、茜が抱き付いてきた。そして、俺の肩に顔を埋め、大泣きし始めた。

「良かったあ！本当に良かったあ！」

「茜……」

茜はぎゅっと俺の体を抱きながら、泣き続けていた。首を回して逆を見ると、愛菜と守人も泣いていた。

「俺、海に沈んでいった筈じゃ……」

「た、助かったんだよ、じ、自衛隊の人が、救助してくれて、それで……」

ぼろぼろと涙を流し、愛菜ははっきりと喋れていなかった。守人は俺の足に手を置きながら、意味の分からない言葉を言い続けすがりついていた。

段々と意識が戻ってきた。その時、はっと重要な事を思い出した。「俺、ミサイルに撃たれたんだ。どうして俺、生きているんだ？」

「どうやら、二発のミサイルがお互いを相殺してしまったようだ。流石に激しい爆風に呑み込まれてしまったが、運が良かったのか、君は右腕の火傷だけで助かったんだ」

「あ、あの最後の潜水艦は？」

「君が撃ち落としてくれたよ。自衛隊顔負けの根性だ」

自衛隊の人はそう説明してくれた。右腕を見ると、確かに酷い火傷を負っていた。

左肩で泣き付く茜に頭を凭れ、左腕をゆっくり茜の背中に回した。「茜、大丈夫だ。俺はこの通り生きてるから」

「うわああああ、孝明くうううん！」

相変わらず泣き叫びながら、茜は更に強く抱き締めてきた。

良かった。俺は、助かったんだ。でも、兄貴は？

はっとして、島の方を振り向いた。もうだいぶ遠くになっているが、まだそこに島はある。

「兄貴……」

絶対に、帰ってきてくれ、兄貴。

格納庫に入ると、少し空気が変わった。ひんやりとした冷たい違和感が漂っていた。

「いつもと違う……」

格納庫は普段、こんな低い温度ではない。

という事は、誰かがここにいる。

「誰だ。どこにいる？」

辺りを見回してみた。

すると、正面のコンテナの陰から、一人の男が出てきた。

「待っていたぞ、禎志」

「やはりお前か……」

その瞬間、後ろの扉が力強く閉まった。そして、鍵の閉まる音がした。

しかし、禎志は動揺しなかった。

「何だよ、俺を逃げられないようにして自爆か？」

「ふふ、私はしない。ただ、お前がするかどうかだな」

「だったら答えは一つだ。ここでお前をあの世へ道連れにしてやるよ」

「ごめんな、皆。最初からこうなる事は分かっていたんだ。」

禎志はじつと種子野を睨み、そして銃を奥にある核の入ったコンテナに向けた。種子野は平然として、表情を変えようとしない。

しかし一瞬にして、それが不気味な笑みに変わった。

「な、何だ？」

「禎志。これを見ても、この島ごと爆破されるか？」

すると種子野は突然自分の真後ろにあったコンテナのスイッチを押し、その扉を開けた。禎志は警戒し、その方向へ銃を向けた。

「私がお前専用隠していた秘密兵器、『A』だ」

徐々に扉が開いていき、その中身が現れていく。どうやら妙な液体の入った、大きなカプセルだった。

それを見た瞬間、禎志の全身に衝撃が走った。

「う、嘘だろ……!!」

禎志は自然に銃を下ろした。そして、そのまま銃を足元へ落とすってしまった。

カプセルの中には、一人の人間が入っていた。

衣類は身に着けておらず、代わりに全身に様々な機械が着けられている。生きているらしく、胸元が一定間隔で上下する。

細くすらりとした腕と足。伸びっ放しになり、背中くらいまでの長さで水中に漂う、黒い髪。

そして胸の中央にある、小さな弾痕。

「さあ、禎志。よく見てみる」

「あ、ああ……」

あまりの衝撃に、種子野に対する怒りすら沸かない。戦慄と悲しみが、完全に心を支配した。

間違える筈が無い。あの顔を忘れた事など、今まで一度きりも無い。

「あ、明奈……」

今まで決して敗れる事も崩れる事も無かった禎志の心は、そこで一気に屈した。

力が抜け、その場に膝が崩れた。ただ弱々しく、残酷な姿にされた明奈を見詰める事しか出来なかった。

「う、嘘だ……そんな事は」

「禎志、どうだ。さっきのように私を道連れにすると試してみる。私を殺し、この島を爆破すると言ってみる！」

種子野は勝ち誇ったように叫んだ。そして、汚い笑い声を上げた。

「言えないだろう、撃てないだろう！これがお前への最終兵器、^{アキナ}「A」だ！」

更に笑い声を上げ、あの男は俺を見下してきた。

明奈はあの時、死んだ筈だった。俺の考えを呼んだのか、種子野は喋り続けた。

「あの時まだこいつは死んでいなかった。そしてお前なら私への復讐を誓うだろうと読んでいたのだ。予測など簡単だ。お前も、私の血を引いているのだから。そしてこのような事態の為に、ずっとお前に分らない場所でこいつを造り上げていたのだ！」

そして種子野はそのコンテナに入り、カプセルの隣にあった機械

の前に移った。

「禎志、これを受けてみる！」

その瞬間、明奈の体がびくりと揺れた。同時に部屋の隅々からバチバチと目に見える程の電流が襲ってきた。地面に辺り、激しい音を立てている。

どうやら明奈にショックを与え、その意識の波に反応して電流が発射されるようだ。あの機械を破壊しない限り、止められそうにはない。

「さあ、これが明奈の感情だ。全身で感じ取るが良い！」

禎志は正面から迫ってきた電流を横へ避けた。

しかしその瞬間、追いかけてくるかのように、こちらへ曲がってきた。そして電流が、左足に触れた。

気を失いそうになる程の衝撃が、体中を駆け巡った。感覚を失い、その場に倒れる事しか出来なかった。

まさか、軌道が変わるとは……

「ううっ……」

「どうだ、私の造った兵器もなかなかのものだろう」

種子野は完全に闇に染まった表情を見せていた。種子野はコンテナの中にいる為、電流を浴びる事は無い。

一方、電流の方向は明奈の不安定な意識を元に動いている為、非常に変則的だ。

「その電撃を浴びれば、一気に神経が麻痺を起こし、立つ事も動く事も出来なくなるぞ」

「くそっ……」

視線を明奈へと向けた。

何に変えても、明奈を助きたい。明奈が生きていると分かった今、彼女を助ける為に全てを尽くしたい。

あの男に命を奪われ掛け、残酷な操り人形にされ、その手の上で弄ばれ……

可哀想だ。あの輝く笑顔を、こんな腐った人間の為に奪われたの

だ。

この嘲笑う男を、本気で殺したい。撃ち抜いて、引き裂いて、跡形も無くなる程に潰してやりたい。

「ぐあああああ！」

再び電流が体を襲う。背中 of 辺りに流し込まれ、一瞬意識が飛んだ。地面に叩き付けられた痛みで、何とか我に返った。

すまない、皆、明奈……俺はもう無理だ。ここで死ぬだ。

ふと明奈に目をやった。まだ体を痙攣されながら、ショックを浴びせられている。

その時、一度だけ明奈の目が開いた。

「あ………」

すぐに閉じられてしまった目を見詰めながら、俺の中で何かが込み上げてきた。

確かに、目を開けた。そして、俺を見た。驚いた表情だったのか、嬉しい表情だったのか、分からない。

しかし、確実にその目は俺を捉え、語りかけてきた。助けて、と。

「明奈………」

「禎志、これで終わりだ」

その言葉にはっとし、横を見た。

左右から電撃が首元へ近付いていた。これを食らえば、確実に死ぬ。

「さらばだ、禎志！」

「………待つてろ、明奈」

必ず助ける。もう一度、力を貸してくれ！

小爆発が起こり、激しく煙が立ち込めた。

煙で一杯になった格納庫の中で、種子野は大きく息を吐いた。

「禎志、強かったな」

本当に強かった。どんなに憎まれようとも、どんなに父親に反抗的であろうとも、強さだけは本物だった。

どれだけの兵を送っても、完全に不利な状況でも、その血を充分に発揮し、そしてとうとう父親の命に手を伸ばしかけた。

最後には復讐に染まり、躊躇無く大量の殺人を行った。自分と同じ、闇の人間だった。

しかし最後は、その心の奥で僅かに灯っていた光に負け、命を落とすとした。

「その甘さが無ければ、私を殺せたかもな」

「誰が死んだって？」

突然そう声が返ってきた。煙の方に目を向けると、霞んだ人影が現れた。

そこに立っていたのは、紛れも無く禎志だった。その目を見た瞬間、種子野の背筋が一瞬にして凍った。

「馬鹿な！確実に当たった筈だ！」

「ああ、当たったさ。痛過ぎるんだよ……」

禎志の首からは、止まる事なく大量の血が流れ出ていた。普通の人間なら、ほぼ死んでいる筈だ。

「どうやら俺は、完全にあなたの血を引いているみたいだな。殺す事に躊躇いが無い」

そうして禎志は、種子野に赤と銀に輝く銃を向けた。

そして、躊躇無くその胸部を三発撃ち抜いた。一瞬種子野の体が踊り、口からゴボゴボと血が溢れ出した。

「うばぁ……禎志」

そう呻きながら、種子野は仰向けに倒れた。禎志はすぐに歩み寄ると、種子野の胸を踏み付けた。

「ぐう……！！」

「ほら、これがあなたの自慢の息子の姿だ。どうだ、満足したか？」
禎志は冷徹な目で種子野を見下ろした。種子野はふっと笑い、最

後の言葉を告げた。

「ぐう………禎志、強くなったな。お前は立派な、俺の息子だ………」

「あなたのお陰でここまで強くなれた。感謝するぜ」

禎志は右手を下に出し、銃口を種子野の顔面に向けた。

「………じゃあな、親父」

銃声が格納庫に響いた。

禎志は何度も引き金を引いた。その度にレーザーが種子野の顔を捉える。

「ふう………」

その場に銃を落とした。そしてよろよろと明奈の元へ向かう。

「明奈、今、助ける………」から

禎志は手を伸ばした。

その瞬間、格納庫の中央で、一人の青年が崩れ落ちた。

最終章 太陽と月が一つになる時

孝明達四人は船の中の救護室に運ばれ、船は日本に戻る事になった。

特に右腕の火傷が激しい孝明は、指先から肩まで包帯でぐるぐる巻きになってしまった。

「東京に戻ったらすぐ病院に運んであげるからね」

治療をしながら、自衛隊の男の人は優しく言ってくれた。

「でも、あの島にはまだ……」

「大丈夫。事情はちゃんと女の子が説明してくれたよ。安全を確保したら、すぐに探索を始めるさ」

それだけでは落ち着かないが、今は自分を無理やり納得させた。

隣に目をやると、両足をベッドの上に乗せて座っている愛菜が俯いていた。

「私達、助かったんだよね……」

「ああ……」

「そう、思えば良いんだよね……」

愛菜はそう呟くように言いながら、包帯が巻かれた右の太腿を撫でていた。

愛菜の言葉に、返す言葉が見つからない。とりあえず、聞こえないくらい小さな声で「うん」と曖昧に答えた。

「……あれ？」

ふと、窓の外を眺めていた茜が声を漏らした。

「どうした、茜？」

「何か、さっきから島が近付いてきてるような……」

「何だつて？」

俺の声と同時に、自衛隊の人が窓の外を覗いた。

「本当だ。確かにこれは怪しい」

孝明は禎志の話の思い出ししていた。

あの島は陸なんかじゃない。大きな、一隻の巨大軍艦。実際、俺達がいる間もあの島、いやあの船は、ずっと動き続けていたのだ。「こっちに真つ直ぐ向かってきている。まさか東京を目指して？」

「だとしたら危ない。すぐに上に伝える！」

自衛隊の人はもう一人の隊員に告げ、その隊員が勢い良く部屋を飛び出していった。

「兄貴は大丈夫かな」

「大丈夫だよ。きつと帰ってくる。約束してくれたから」

愛菜は願いと不安を、胸の前でぎゅっと固く握り締めていた。

四人は、禎志を信じ続けた。

赤い警報ランプが点灯し、島中に警告が出されていた。

「この島は、目標地点五〇メートル圏内で爆発します。あと五〇分で、目標に到着します。それまでに、この島から避難してください。この島は、目標地点五〇……」

その警報は、禎志と種子野が倒れている格納庫にも流れていた。

種子野は既に息を引き取り、面影も残らない無残な顔から、真つ赤な血を流していた。

そんな中、禎志は辛うじて生きていた。明奈が閉じ込められているカプセルが入ったコンテナの目の前で、力無くうつ伏せになっている。

「うう……」

声が、上手く出ない。体にも、力が入らない。でも、俺が何とかしなくちゃいけないんだ。

明奈を助けて、脱出するとともに、この島を爆破させる。何とかしてもこの島を止めなくちゃならない。

この島の目標地点は東京なんかじゃない。この島が追っているのは、紛れもない、この二つのペンダントだ。

太陽と月が一つになる時、世界は滅びる。そんな言葉を、親父が

言っていた気がする。

今俺が持っている太陽と、陽奈が持っている月。この二つがこの島の五〇メートル圏内に集まった時、この島は爆発を起こす。

親父が仕掛けていた、最後の最期の罠だ。恐らく体の中に機械でも仕込んで、自分が死んだら発動する仕組みだろう。

いや、今はこんな事を推理している場合じゃない。とにかく動かなければ。

「うっつ！」

動け、動いてくれ、俺の体！

力を入れる程にミシミシと音が鳴りそうな右腕を突き、必死に体を持ち上げる。そしてふらふらと上体を起こし、膝に手を突いてゆつくりと立ち上がった。

「明奈………」

一歩ずつ、足を引き摺るように進んでいく。そしてとうとう、明奈のカプセルの目の前まで来た。

明奈、今助けるからな。

カプセル脇のスイッチを押す。するとガシャンと派手な音の後に扉がゆつくりと開き始めた。中の液体が激しく漏れ出し、液体が無くなった為に明奈の体は徐々にこちらへ傾き始めた。

そしてとうとう、明奈は俺の胸元に倒れ込んだ。体中に走る電流のような痛みをぐつと堪え、全力で受け止めた。

ほつと落ち着くと、明奈の表情を見た。

最後に見たあの時から四年ぶりに見る明奈は、やはり明奈のままだった。

髪はバサバサで伸び切っており、血色は悪く唇が青白くなっているが、それでもこの可愛い表情は変わっていないかった。今にも途絶えそうな僅かな心音が、明奈の胸元から伝わってくる。

右腕でしっかりと明奈を抱き抱え、少しずつ出口へと向かう。

「ぐつ………」

しかし、一瞬にして力が抜け、その場に明奈もろとも倒れてしま

った。

二人の頭の間には、禎志が使っていた銃が落ちていた。それにもくれず、禎志は最後の力を振り絞って右手を明奈の頬に当てた。

「明奈、目を覚ましてくれ……」

明奈の反応は無い。しかし、衰弱しているものの確実に生きている。視界が霞んでいく中、必死に明奈の名前を呼び、頬を撫で続けた。

その瞬間、明奈の体がびくりと震えた。

「あ、明奈？」

「っ……かはっ！」

体を震わした後、明奈は口から大量の液体を吐き出した。飲み込んでいたのはカプセルに入っていた液体なのか、緑色に濁っていた。有り得ないくらい何度も吐き出し、辺りが水溜まりになりそうな程だった。

全て吐き出した明奈は、その瞳をゆっくりと開いた。

「明奈！」

自然と大きな声で呼んでいた。明奈はもう一度目を閉じて、再び開けた。

「明奈、分かるか？……俺だ、禎志だ」

「……さだ、し……くん」

ぼつりと明奈は言った。掠れたかなり小さな声だったが、禎志の耳にははっきりと届いていた。

「良かった」

禎志は右腕に力を込め、明奈の体を抱き寄せた。

「良かった、明奈」

「私、全部聞こえてたよ……禎志の声も、陽奈の声も。禎志の弟妹達が頑張ったのも、見えてたよ……」

「明奈……助けられて、良かった」

「……有難う、禎志君」

明奈は僅かに動く表情を変え、精一杯の笑顔を見せてくれた。

その笑顔を見た瞬間、全てをやり尽くした気がした。もう死んでも良い。そんな感情が心に灯った。

もう意識がほとんど消えていた。明奈の表情が周りの景色とともにぼやけ始める。

最後に、ポケットからある物を取り出し、目の前に置いた。明奈の前髪を優しく掻き上げると、頬に手を乗せ、言葉を残した。

「明奈……お前の事が、好きだ」

そう言い、もう重たい瞼を閉じた。

そして徐々に、明奈に顔を近付ける。少しずつ、明奈の吐息が感じられる。

そして

「あつ……」

一瞬、冷たい何か体が中に走った。一瞬の怯みが解かれると、さっと窓の外へ視線を動かした。

「あ、愛菜？」

突然の行動に、孝明が隣から声を掛けてきた。

「今、何か……」

先程の一瞬の感覚。正体は分からないが、物凄く嫌な印象だった。何かの糸がプツンと切れたような、何かが終わりを告げたような……

「ま、まさか……」

そう考えると、頭痛がしてきた。これ以上、最悪な事態を考えたくない。

そう、義兄あにが死ぬ訳がない。絶対に帰ってくる筈。

「な、何か島が凄い近付いてきてるよ！」

茜が窓の外を見て言う。その言葉に、孝明も立ち上がって窓の外を確認した。

その間も、私は自分の体を必死に抱き、襲い掛かる憎悪感に堪え

ていた。体の震えが止まらなくなり、得体の知れない恐怖心が込み上げてくる。

すると、隣に温かい何かに触れてきた。

「愛菜お姉ちゃん、大丈夫？ねえ、大丈夫？」

かなり焦った様子で、守人が愛菜を見詰めていた。

守人は、一番禎志と深い繋がりを持つている。もしかしたら、守人も同じようなものを感じているかも知れない。

愛菜は無理して笑顔を作り、守人を抱き寄せた。

「大丈夫よ。心配してくれるの？」

「うん、だって、愛菜お姉ちゃん苦しそっだもん」

「守人君は優しいんだね。有難う」

守人を抱き締めると、少しだけ安心感が出た。

「やべえ、あんなに近付いてきてる」

「ど、どうしよう孝明君」

窓際では、孝明と茜が慌てふためいていた。

「だいぶ近いな。距離で言って六〇メートルちよっとか。短時間でかなり近付いてやがる」

「な、何とかしないと……」

「そうは言っても、俺達には何も出来ない。自衛隊の人に頑張ってもらおうか……」

二人の会話を聞きながら、愛菜は守人に頭を凭れ掛けた。

「お義兄ちゃん……」

格納庫の中央、並んで倒れる二人。明奈は目の前の禎志を見詰め、呼吸を整えていた。

彼はとうとう、力尽きてしまった。あれからもう、目を覚まさない。私の声にも反応しない。

「あと三分で、目標に到着します。それまでに、この島……」

部屋にはそんなアナウンスが流れ続けている。彼の顔を見詰めた後、その前にある銃に目を向けた。

私が、終わらせるんだ。

そんな感情が湧き出した。もう彼も動けない。私ができるしかない。ふと、彼の先に倒れている男に目が行った。

全ては、あの男から始まった。でも、彼が仇を討ってくれた。彼は、ずっと背負い続けてきたものをついに撃ち破った。

あの時、私が彼の足手纏いにならなければ彼が死ぬ事は無かった。だから最後は、私の手で全てを終わらせる。自分の為にも、彼の為にも、そしてどこかで彼の弟妹達と生きていくだろう、陽奈の為に。

目の前に置いてある太陽のペンダントを見た。

いつ、どこで失くしたのか、記憶に無い。何故、これを彼が持っていたのだろうか。

でも、彼が届けてくれたのは、きっと運命だ。もし生きて帰れたなら、これを渡して告白なんてされてみたかった。

「有難う、禎志君……」

彼にそう言い残し、最後にとうとう叶わなかったキスをした。

そして私は、その銃を手を取った。まだ完全に握力の戻らない手でしっかりと握り、銃口を自分から見て真下にある核のコンテナに向けた。

意を決し、指に力を込めた。

さよなら、陽奈

その時、全てが終わった。

赤く燃え盛る炎が、禎志、明奈、種子野を包み込む。

ペンダントが、炎にこだまするようにキラキラと輝いていた。

孝明、愛菜、茜、守人の四人が、窓の外を見た瞬間だった。

島が一気に火を噴き、巨大な炎に覆われた。たった一瞬で、島が崩れていく。

四人は大きく目を見開き、完全に度肝を抜かれた。

「爆破、した……？」

孝明は驚いたまま、眩くように漏らした。

「う、嘘でしょ……？」

「まさか、禎志お兄ちゃんが……」

「い……い、いやああああああ！」

愛菜の叫び声が、部屋中に悲痛に響く。誰も信じられなかった。信じたくなかった。

まだあそこには、禎志がいる。

「そ、そんな、嘘だろ。ふざけんな！あんな所で兄貴が死ぬ筈無い！」

孝明は急いで扉を開け、外に出た。

激しい爆風の余韻が襲ってくる。それが消えると、じっと島に目を凝らした。

島は爆発を繰り返し、徐々に崩れ落ちていく。いずれ島は、深い海の底に沈んでいくだろう。

すると、茜が愛菜を支え、守人と一緒に出てきた。

「孝明君……」

「何だよ、何でこんな終わり方……」

孝明はぐつと目の前の手すりを握り締めた。怒りと悔しさを込み上げ、どんだん力が入っていく。

「絶対に、帰ってくるって約束したじゃねえかよ！」

思い切り手すりを殴り付けた。少し血が出てきたが、湧き上がる

感情に痛みが全て流されていった。

「くっ、うぐっ……」

その場に膝を落とした。ただ、ここで泣く事しか出来なかった。愛菜もその場に座り込み、茜と守人も泣き出した。

四人は生き残った。何よりも、大切なものを犠牲にして……

それから、二日が経った。

四人は東京湾のすぐ近くにある病院の一室にいた。

四つのベッドが置いてあり、それぞれ一人ずつ使っている。四人に見舞いは来ない。来るとすれば、禎志だけだ。しかし禎志はもう、来る事は無い。

そしてこちらに帰ってきてから、愛菜が特に心を閉ざしてしまった。愛菜だけではない。実質他の三人も大きく傷付いている。

四人が禎志を失った事は、本当に辛い事だった。自分達を救ってくれた人を犠牲に生きるのは、死ぬ事よりも苦痛だ。

それならいつその事、あの時に……

そんな思考が頭を駆け巡った瞬間、孝明は我に返って首を振った。「な、何考えてんだ、俺」

ふうと落ち着き、自分から見て廊下側のベッドを見る。茜がすやすやと眠っていて、小さな寝息が聞こえる。

一番遠い対角線のベッドには、守人がいる。ベッド用の机で夢中になって絵を描いている。どんな絵を描いているのかは分からない。ただ二人に言えるのは、とても悲しいという事。茜は何も手が付かなくて寝るしかないだけ。守人も手は動かしているが、頭の中ではそう楽しい事は浮かばないようだ。

そして、ちょうど反対側にいる愛菜。昨日、今日とほぼ一言も話さず、ずっと窓の外をとても遠い目で見詰めている。声を掛けても、反応すらしてくれない。

そう冷静に状況を判断しているように見える俺も、そんなに精神的には安定していない。毎回寝る度に魘されてしまい、睡眠不足に陥っている。

俺達四人は、ただ何も無い時間に流されていくだけだった。しかしその時、俺達の運命が再び紡がれ始めた

急に病棟が騒がしくなっていた。すると一人の看護師が入ってきた。

「四人とも聞いて。あの島の付近で救出された人が、ここに運ばれてきたわ」

「えっ」

声を出したのは俺だけだったが、守人も反応し顔を上げた。騒がしさと眠りが浅くなっていた茜も起き、話を呑み込んだ。

「二人運ばれて来たわ。あなた達の身内かどうかはこっちには分からないけど、二人とも生きているわ」

「二人？」

二人と言う事は……一人は兄貴だ。絶対にそうだ。とするともう一人は、種子野か？

いや、もしかしたら二人とも何の関係も無い隊員かも知れない。でも、兄貴が助かっていると信じたい。

「皆、見に行こう！」

「禎志お兄ちゃん、助かってるよね？ね？」

守人が震えた声で問い掛けてくる。笑顔で頷き、生還を信じた。

「ああ、きつと生きてる筈だ」

「私も行く」

茜もベッド脇にあるスリッパを履き、点滴台のストッパーを外した。

「おい、愛菜」

愛菜は動かず、まだ外を眺めている。

「お前も来い」

「……私には行かない」

「はあ？何でだよ、お前も一緒に来い！」

「行きたくない……」

すると外に顔を向けたままの愛菜の頬に、涙が零れ落ちたのが見えた。

「お願いだから、三人で行ってきて……」

「……分かったよ」

「愛菜お姉ちゃん？」

さつと愛菜の元へ行こうとする守人を、肩に手を置いて引き止めた。

「守人、行こう」

「うん……」

守人が茜の手を握り、三人で部屋を出る。愛菜が視界から消える瞬間、守人が愛菜に振り返ったのが印象深く感じた。

部屋を離れると、守人の頭を撫でてやった。

「お前は優しいな」

「愛菜お姉ちゃん、何か可哀想だよ」

「大丈夫。あいつはそんなに弱くないよ」

守人を宥め、引き続き誘導してくれている看護師に付いて行った。そしてずっと奥の部屋まで行き、手術室に入れられた。

既に緊迫した空気で手術が行われており、二つの手術台がある。

「この二人よ」

その二人を見た瞬間、三人は言葉を失った。

「まさか……」

空は真っ青に晴れ渡り、辺りからは風が木を揺らす音だけが聞こえてくる。

あの事件から四年後、都内のある教会。その一室で、孝明はやや

大きめの鏡を見ていた。

「うわあ、何か不自然な感じだなあ……」

自分の格好を見て、何となく恥ずかしさと緊張が込み上げる。

「大丈夫、似合っているよ」

着こなしを手伝ってくれた紳士的な男の人が言ってくれた。少し照れ臭い気がする。

「孝明兄ちゃん、どう？」

その声に振り返る。そこには、何とも良い雰囲気漂わせる服を着た守人がいた。

「おお、守人かっけえじゃん！」

「うう、何か恥ずかしいよお」

そう頬を赤く染める守人は、中学一年生になったとは思えない幼さを醸し出す。

そういう俺も、高校二年生になった割にはだらしない。高校のバスケ部でもレギュラー取れてないし。

「あ、二人とも似合ってるね」

すると、部屋の扉が開き、茜、そして陽奈が入ってきた。二人とも綺麗なドレスを着ている。

「わあ、陽奈姉ちゃんも茜姉ちゃんも綺麗！」

守人が二人に駆け寄り、目を輝かせる。そんな守人と愉快に笑い合い、茜と陽奈がドレスを見せびらかす。

「皆さん似合っているよ」

先程の男性が褒めてくれ、茜がテンションを上げる。

「ほらほら孝明！どうどう私？可愛いでしょ？」

「あー、はいはい。可愛いから」

「何でそっぽ向くの？もつと素直に喜びなよう！」

「だあつ、うるせえ！」

二人の様子を見て、陽奈、守人がぐすくすと笑った。

その時、扉が再び開いた。そこに現れたのは、白いタキシードを着た、禎志だった。

「おつ、皆なかなか良いな」

禎志が入ってきた瞬間、四人は禎志の元に駆け寄った。

「うわあ、兄貴かつけえ！」

「お義兄ちゃんカツコ良い！」

「禎志兄ちゃん凄い！」

「一目惚れしちゃう！」

「そ、そうか、何か照れるな……」

その照れる仕草が何とも守人とそっくりだったので、四人は愉快に笑った。

あの島の爆発後、自衛隊の捜索によつて二人の人物が助けられた。そのうちの一人は、禎志だった。

多量出血を中心にほぼ瀕死状態にまで近付いていた禎志は、素早い処置のお陰で何とか命を取り留め、約束通り四人の元へと帰つて来たのだ。

失った左腕こそ元には戻らないものの、その体は異常な程の回復力を見せ、予定よりも一カ月程早く退院した。それは島にいた頃、禎志が自分で作っていた薬を服用した為とは、孝明達も知らない。

禎志の意識が戻った時は、四人は一斉に抱き付いた。まだ手術後で禎志は痛そうにしていたが、その表情はとても嬉しそうだった。

そしてもう一人、禎志の他に助かった人物とは……

鐘の音が鳴り、教会の大きな扉が開く。そこから現れた二人を見て、孝明達は拍手を送った。

「二人ともおめでとう！」

「とうとうゴールインだね！」

皆で祝いの言葉を浴びせると、新郎の禎志はまた照れ臭そうに笑った。

「はは、これも皆のお陰だよ。これからは六人で幸せに暮らしてこ
うな」

「ヒューヒュー、そう言ってる自分が一番幸せそうだよ兄貴！」

「そんな冷やかすなって、孝明」

禎志は満面の笑みで言い返した。この半年後、自分の持っている
驚異的な技術力で世界企業のトップに立つ事となる禎志は、これま
での二〇年間で最高の笑顔を見せていた。

「あ、そうだ。陽奈」

「え？」

すると、ぱつと新婦の手から陽奈に花束が投げられた。

「え、私？」

「もちろん」

「まあ、陽奈にも良い結婚して欲しいからな」

夫婦となった二人は顔を見合わせて笑った。

「うん、私良い相手と結婚する。例えば孝明みたいな、だらしない
人じゃなくて」

「な、何で悪い例に俺を出すんだよ！」

「良いの良いの！孝明には私がいるんだから！」

そう言い、茜が孝明に飛び付いた。

「私が結婚してあげるから！」

「双子が結婚出来るかあ！っーか出来てもするか！」

二人の様子を見て、陽奈がお腹を抱えて笑った。更に守人は、首
を傾げた。

「あれ、じゃあ僕余ったから、陽奈姉ちゃん？」

きよとんとした表情で守人に見上げられると、にっこりと笑って
頭を撫でた。

「そうだね、守人なら良い子だし可愛いから良いかな」

「お、おい、俺が駄目ってどういう事だあ！」

「だ、か、ら、孝明には私という可愛い美少女がいるでしょー」

「だあーっ、うるせえっ！」

孝明はまた抱き付いてくる茜を引き剥がそうと必死にもがいていた。

四人が楽しそうにじゃれ合う風景を見て、禎志は自然と笑顔が零れた。

「はは、これからも楽しくなりそうだな」

そう言い、隣にいる新婦に声を掛ける。

「な、明奈」

「うん、そうだね」

明奈は笑顔を見せ、禎志にぎゅっと寄り掛かった。

「あーっ、お姉ちゃんべつたり甘えてる！」

「良いでしょ、新婚ホヤホヤで」

明奈は禎志の顔を見上げ、一緒に笑った。陽奈も守人を前に抱きながら、同じ幸せそうな表情を見せた。孝明と茜も、まだじゃれ合いながら楽しそうに遊んでいた。

禎志と明奈の胸元には、太陽と月のペンダントが眩しく光輝いていた。

最終章 太陽と月が一つになる時（後書き）

最後までお読みしてくださった方々、本当に有難うございました。本作は楽しんでいただけましたか？

少しでも面白かったと思っていただければ光栄です。

現在連載中の他の小説、次回作などもどうぞよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8470g/>

ペンダント

2010年10月8日14時48分発行